

佐々木 高明

日本文化の源流を探る



海青社



スマトラ島北部のトバ湖を望むバタク人の稲田にて
(1991年：インドネシア北スマトラ州／撮影：吉本 忍)

刊行にあたって

国立民族学博物館長

須藤 健一

ヒマラヤから日本にいたるアジアを視野に入れた壮大な農耕文化論が佐々木高明先生の研究の真髄である。先生は日本山村の焼畑調査から、ネパール、インド、インドネシア、タイ、台湾そして中国などでフィールドワークをおこなった。農耕基層文化の研究一筋に半世紀、まさに「一徹な研究者」であった。

一九七一年に名著『稲作以前』（日本放送出版協会）を上梓され、縄文時代の西日本に雑穀やイモを栽培する農耕文化が存在したと提唱された。これは中尾佐助先生の照葉樹林文化論を発展させた説である。当時、日本列島の農耕は、弥生時代の水田稲作にはじまるとい説が主流で「異端の学説」と批判された。その後、縄文遺跡で穀類の発掘が相次ぎ、佐々木仮説は見直されたのである。

照葉樹林文化の「南の道」の文化とともに、北東アジアを起源とする「ナラ林文化」の存在、さらに南島や北方アイヌの文化なども視野に入れ、日本の基層文化はさまざまな文化を受容し、重なり合って形成されたことを実証した。これが日本文化重層論である。この重厚な研究により、二〇〇四年に「第十四回南方熊楠賞」を受賞された。

佐々木先生は「やー」と手を挙げて誰にでも話しかける学者だった。そのお人柄が、文系だけでなく、分子生物学や遺伝学など理系の研究者を巻き込んでアジアを俯瞰する農耕文化論の第一人者ならしめた源であつたに違いない。

亡くなられるまで日本の農耕文化を描き続けられた。未完のまま残された本論集が、後輩とお弟子さんの手によって世に出ることになった。

本書は広い視野と深い読みからうまれた、佐々木農耕文化論の金字塔である。

平成二十五年七月

日本文化の源流を探る



目次

刊行にあたって……………	1
(須藤健一)	
序論 研究の原点と日本民族文化起源論……………	9
第一章 『稲作以前』からの出発——研究の原点をふり返る……………	11
第一節 『稲作以前』を再考する……………	11
第二節 稲作以前の農耕の検証……………	25
〔補説〕 先史焼畑農耕の検証——考古学による焼畑の痕跡の発見……………	40
第二章 戦後の日本民族文化起源論——その回顧と展望……………	43
はじめに……………	44
第一節 岡正雄と柳田國男の日本文化起源論……………	45
第二節 日本文化形成論へのいくつかのアプローチ……………	48
第三節 日本文化の源流の比較研究——民博を中心とした学際的研究……………	51
第四節 日本人及び日本文化の起源の研究——人類学を中心としたプロジェクト……………	54
第五節 日本民族文化起源論の課題と展望……………	57
第一部 日本農耕文化の形成……………	63
第三章 日本農耕文化の源流をさぐる……………	65
〔解説〕……………	65
第一節 日本農耕文化源流論の視点……………	67

第二節	日本における畑作農耕の成立をめぐって	78
第四章	東アジアの基層文化と日本	95
〔解説〕	95
はじめに	96
第一節	東アジアにおける自然と文化の配置とその変動	97
第二節	東アジアの基層文化と日本	119
第三節	稲作と稲作文化の展開と伝来	138
第五章	畑作文化と稲作文化——日本農耕文化の基層を作るもの	153
〔解説〕	153
はじめに	154
第一節	稲作文化の伝来と展開	156
第二節	基層文化としての畑作文化	165
第三節	稲作文化への収斂と畑作文化の伝統	176
第六章	稲作の始まり	189
〔解説〕	189
はじめに	190
第一節	縄文の二つの稲作——畑稲作と水田稲作	191
第二節	東アジアにおける稲作の起源と展開——長江中・下流域起源とその展開	193

第三節	稲作の日本列島への伝来——三つの道	196
第四節	弥生稲作の実像	197
第五節	日本列島における稲作の展開	199
第六節	原初的天水田の検証——水田と畑作の間	200
第二部	農耕文化の三つの大類型	203
第七章	照葉樹林帯にその文化の特色を探る	205
〔解説〕	照葉樹林文化論をめぐって	205
第一節	照葉樹林文化とは何か——照葉樹林帯における文化の共通性	207
第二節	照葉樹林帯の食文化	218
第三節	雲南紀行・照葉樹林文化のふるさとを行く	250
第八章	初期の照葉樹林文化論——一九七〇年代の論説	261
〔解説〕		261
第一節	照葉樹林文化——その特色と伝来	262
第二節	稲作文化の形成と照葉樹林文化	284
第三節	モチ文化の発見	311
〔補説〕	照葉樹林文化とナラ林文化	317
第九章	ナラ林文化をめぐって	319
〔解説〕		319

第一節	ナラ林文化——北からの文化を考える	320
第二節	ナラ林文化考——東北アジアの基層文化の文化生態学	327
第三節	二つのナラ林帯とその文化史的意義	352
第十章	根菜農耕文化論の成立と展開——オセアニア・東南アジアの文化史復元への寄与	373
〔解説〕	根菜農耕文化論の成立と展開	373
はじめに	375
第一節	根菜農耕文化論の提唱とその意義	375
第二節	オセアニア農耕の形成——ニア・オセアニアにおける文化の組替え	381
第三節	東南アジアの根菜農耕文化——その実態と文化層の復元	385
第四節	根菜農耕文化を構成する要素——文化クラスターの分析から	396
〔補説〕	Hack耕と根菜農耕——ヴェルトの農耕起源論批判	400
第三部	日本の山村文化	405
第十一章	モンスーンアジアの焼畑農耕民社会における狩猟——『後狩詞記』の背景をめぐる比較民族学	407
〔解説〕	407
はじめに	408
第一節	焼畑民社会における狩猟の役割と狩猟法	409
第二節	獣肉の分配と山の神の加護	414
第三節	儀礼的共同狩猟とそれに象徴されるもの	417
第四節	終りにあたって——比較民族学の視点から	425

(補論)『後狩詞記』と『遠野物語』および「山人論」をめぐる	428
第十二章 ヒエ栽培についての二つの覚書	435
〔解説〕 ヒエを主作物とする焼畑とヒエ穂の火力乾燥	435
第一節 ヒエを主作物とする焼畑とその経営技術——白山麓・尾口村の事例を中心に	439
第二節 ヒエの加熱処理技法とその用具	473
第十三章 山民の生業と生活・その生態学的素描——白山麓と秋山郷	497
〔解説〕	497
はじめに	499
第一節 白山麓における出作りと山民	501
第二節 山民とその生業——資源の開発・利用の多様性	514
第三節 山民の生活文化の特性——非稲作文化の視座から	529
文 献	541
佐々木高明著作目録	559
初出一覧	572
あとがき	575
(寺阪昭信)	

序論 研究の原点と日本民族文化起源論

第一章 『稲作以前』からの出発——研究の原点をふり返る

第一節 『稲作以前』を再考する

(1) 『稲作以前』で訴えたもの

私のデビュー作『稲作以前』

私は一九七一年に『稲作以前』（NHKブックス）を出版しました。そこでは水田稲作農耕が日本列島に伝来してくる以前に、アワなどの雑穀類やイモなどを主作物とする焼畑農耕とそれに支えられた文化が、主として西日本の山地や丘陵に展開していたことを強く主張したのです。この書物は刊行当時、学界でもかなりの反応があり、その後も多数の版を重ねたという意味で、少し気恥ずかしい表現ですが、私のデビュー作といえる著作だと思えます。この書の刊行当時のことを回想し、『東京新聞』（二〇〇四年五月二日）の紙上で私は次のように述べたことがあります（原文の一部を改変・補筆）。

水田稲作農耕が伝来する以前に、焼畑農耕を主体とした農耕が、西日本の山地を中心に展開していたに違いないと主張したこの書は、日本文化は稲作文化そのものであり、稲作以前の縄文時代は採集・狩猟の時代であり、農耕は存在しなかったと信じていた当時の「学界の常識」に大きく反するものであった。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第二章 戦後の日本民族文化起源論——その回顧と展望

本稿は岡正雄・柳田國男の所説に始まり、民博の「日本民族文化の源流の比較研究」をへて、日文研を中心とした「日本人及び日本文化の起源の研究」に至る、戦後の日本民族文化起源論の展開の概要とその間にみられた諸学説の変遷を大観し、あわせてこの種の起源論の直面するいくつかの問題点を指摘したものである。結論として次の4点を摘記することができる。

1. 日本文化を単一・同質の稲作文化だとするのではなく、それは起源を異にするいくつかの文化が複合した多元的で多重的な構造をもつものだという認識が一連の研究を通じて共有されるようになった。
2. 考古学・人類学・遺伝学その他の隣諸科学の発達とそれらとの協業の成果が、起源論の研究に格段の発展をもたらした。その傾向は今後も一層顕著になると思われるが、この種の学際的総合的研究を推進するには、すぐれた研究プロデューサーとそれを支える大型の研究組織が必要である。
3. 日本民族文化起源論の展開は、わが国では日本人のアイデンティティを問うという問題意識に支えられて展開してきたが、最近の国際化の進展などの状況のもとで、この種の問題意識とその理解を求める社会的要請は一層拡大してきている。それに応じることが学界としても必要である。
4. だが、現下の最大の問題は、組織の問題ではなく人の問題である。大林太良が指摘した如く「最近の若い世代の民族学者に日本民族文化形成論の研究が低調なこと」が今日の難問である。日本民族文化起源論を含め、歴史民族学的課題の克服に、日本の民族学(文化人類学)界は、今後どのように対応するのだろうか。

本稿は、ヨーゼフ・クライナー教授の退官記念論文集 H. D. Olschleger (ed.) *Theories and Methods in Japanese Studies*;

このプレビューでは表示されないページがあります。

第一部 日本農耕文化の形成

第三章 日本農耕文化の源流をさぐる

〔解説〕

「序論」でも触れたが、一九七四年に組織として創設された国立民族学博物館は、その後、建物の建築を行い、収集・展示の作業をすすめて、一九七七年十一月によく開館の運びとなった。それを機会に、長期に亘り計画的・総合的な研究プロジェクトを「特別研究」として展開させることとし、「日本民族文化の源流の比較研究」が十年に及ぶ長期計画プロジェクトとして発足した。私はこのプロジェクトの代表者として計画を主宰することとなった。

第一回目（一九七九年度）の研究テーマが「農耕文化」であり、一九八〇年一月二十八日から三十一日まで四日間に亘りシンポジウムを開催した。ここに収録した「日本農耕文化源流論の視点」は、そのシンポジウムの冒頭で行った「問題提起」をもとにしたものである。このシンポジウムは民族学（文化人類学）をはじめ、作物学や植物学・家畜学、さらに考古学や民俗学、地理学や歴史学など、さまざまな分野の研究者が参加し、文字通り学際的な発表と討論が行われた。

その成果は『日本農耕文化の源流——日本文化の原像を求めて(1)』（一九八三）として刊行されたが、その「あとがき」の中で「こうした学際的にも多彩なメンバーを擁した本シンポジウムは、民族学を中心に、これに隣接諸科学の学者が加わった研究としては、少なくともこの問題をめぐる現在の日本の学界の水準を示し得たものであったと私は考えている。今後しばらくの間、この種の研究が行われる際には、このシンポジウムとその報告書である本書が、研究の出発点の一つとなりうるのではなからうか。」と述べているのは、この研究の成果の一端をよく示しているといえよう。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第四章 東アジアの基層文化と日本

〔解説〕

国立民族学博物館における特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」は一九七八年に始まり、以後各年毎に個別テーマを中心とする研究を展開してきた。その最終年度に当たる一九八八年一月十九日から二十二日の四日間を亘り、「日本民族文化源流論の課題と展望」という総括的なシンポジウムを開催し、十年に亘るこの研究のまとめを行った。その成果は、佐々木高明・大林太良(共編)『日本文化の源流——北からの道・南からの道』(一九九一)として刊行されたが、ここに再録した「東アジアの基層文化と日本」は、その冒頭(第一章)に序論的意味をこめて掲載したものである。

ここでは東アジア全体を視野に、自然や文化のおおまかな位置づけとその変動、あるいは日本の基層文化の形成を考へる場合に想定される文化クラスターの確認、及び東アジアの農耕文化を最終的に特色づける稲作文化の問題などを総括的にとりあげた。

但し、本論のもとになったシンポジウムの開催時点が一九八八年であったため、ここでは一九八〇年代前半までの資料に基づいて所論が組み立てられ、叙述が行われている。そのため東アジアにおける稲作の起源とその伝播については旧来の「雲南・アッサム起源論」の立場に立ち、その後に展開された「長江中・下流域起源論」には全くふれられていない。しかし、その点を除く大きな研究の枠組としては有効な点が多く、その後の私の研究を方向づけるフレイム・ワークが、この論文の中で作り上げられた点が少なくない。

私の日本文化論の代表作となった『日本文化の多重構造』(一九九七)の第一章・第二章は、この論文を基礎にして、そ

このプレビューでは表示されないページがあります。

第五章 畑作文化と稲作文化——日本農耕文化の基層を作るもの

〔解説〕

この「第五章 畑作文化と稲作文化」は網野善彦氏が中心になって編集された『岩波講座日本通史第一巻 日本列島と人類社会』（一九九三）のなかの一章として執筆されたものである。そこでは日本の農耕文化の特色を、従来のように単一の稲作文化として捉えるのではなく、非稲作（畑作）文化と稲作文化の二つの異質な文化から構成されたものとして捉えた点に、文化論としての特色がある。とくに「基層としての畑作文化の特色の存在」を強調した第二節は『稲作以前』（一九七二）以来の私の研究の要約とも言える内容を持ち、第三節の「稲作への収斂と畑作文化の伝統」は、日本農耕文化の歴史的特色として、先史時代あるいは古代以来、畑作文化と稲作文化の両者がせめぎ合い、次第に稲作の経済的・社会的役割が大きくなり、遂にはすべての社会的価値をコメに換算する「近世石高制」の完成によって、その極点に達したという事実を指摘した。そのことは文化の面からみれば「稲作への文化的収斂現象」の進展として捉えることができることを積極的に説いた。

しかし、その後の歴史的過程をみると、mono spectrum な生業構造の特色をもつ稲作文化に対し、broad spectrum な生業構造をもつ非稲作（畑作）文化の伝統は、山民文化の中などにその影響を留め、日本農耕文化の多様な特性の形成に深くかわわってきたことは否定し難い事実である。この非稲作文化の役割を注目する視点は、その後、『日本文化の多重構造』（一九九七、とくに第一〇章）や『日本文化の多様性』（二〇〇九、とくに第三・第四章）などの著作の中に継承・展開され、私の日本文化論の重要な論点の一つとなったということができる。

このプレビューでは表示されないページがあります。

第六章 稲作の始まり

【解説】

この「稲作のはじまり」は二〇〇三年二月に『週刊朝日百科37新訂増補 日本の歴史原始・古代7稲と金属器』（通巻五六八号、改訂第一刷）に掲載された論文である。実は一九八七年に刊行された『週刊朝日百科 日本の歴史39』にも同名の論文（以下「旧稿」と略称する）が掲載されたが、それを、全面的に改稿（改訂稿」と略称する）し、「新訂増補」と銘打って刊行されたものである。一九八〇年代の後半から九〇年代にかけて日本列島を含む東アジアの稲作の起源とその展開をめぐることは、数多くの新しい考古学的な発見があり、DNA分析はじめ新しい自然科学的な知見も数多く加わるようになった。その結果、旧稿と改訂稿の二つの論文の間には大きな違いが生ずることとなった。その差異——つまり新しい発見と研究の進展の結果——は、大きく三つにまとめることができる。

その第一は、縄文時代におけるイネを含む作物遺体の新しい発見がつついたことである。旧稿では一九七八年に板付遺跡の縄文晩期の文化層からはじめて整った水田遺構が発見され、縄文の稲作が初めて認められたことから書き始めたが、改訂稿では、埋蔵種子分析、花粉分析、プラント・オパール分析など、いわゆるバイオ・アーケオロジ研究の進展に伴い一九八〇年代以後、縄文時代の作物遺体の発見が相ついでことから筆を起している。とくに九〇年代に入り縄文後期・中期のいくつかの遺跡から稲の痕跡が発見されるようになり、遺跡の立地状況その他から、これらの縄文の稲が、整った水田ではなく、むしろ山地斜面の焼畑耕地や谷間の原初的な水田などで少量ずつ栽培されていたと考えられるようになった。他方では板付遺跡や菜畑遺跡その他では水路や畦道を備えた整った縄文水田がみられるので、縄文時

このプレビューでは表示されないページがあります。

第七章 照葉樹林帯にその文化の特色を探る

〔解説〕 照葉樹林文化論をめぐる

『続・照葉樹林文化』から『照葉樹林文化とは何か』まで

照葉樹林文化論は、私の学的生涯を通じての最も主要な研究課題の一つである。したがって、それをめぐる著作も多い。単行本に限っても、上山春平・中尾佐助と共著で、照葉樹林文化を構成する主要な文化要素を示し、その大枠を示した『続・照葉樹林文化——東アジアの文化の源流』（一九七六）がまず刊行され、ついで私の単著で、照葉樹林文化の民族誌的事例を豊富に示し、「照葉樹林文化が山と森を舞台とする生活文化の体系である」ことを強調した『照葉樹林文化の道——ブータン・雲南から日本へ』（一九八二）が刊行された。ついで一九八二年に私が組織し、同年十月から十二月にわたり、中国・雲南省南部の西双版纳および広西壮族自治区の一部で調査を行った国立民族学博物館中国西南部少数民族文化学術調査団の報告書に当たる『雲南の照葉樹のもとで』（一九八四）が出版され、同行した研究者による稲作起源論や歌垣、モチ性食品、羽衣説話などについての論説が発表された。さらに一九九二年には中尾佐助氏との共著で、兩名のフィールド・ワークの中で蓄積された数多くの写真資料をふんだんに使った『照葉樹林文化と日本』（一九九二）の大冊の刊行をみた。ここでは照葉樹林文化の概説のほか、ヒマラヤから江南山地に至る照葉樹林帯の民族文化誌や「フィールド・ワークで見たこと、聞いたこと」など、画像データとともに照葉樹林文化について豊富な情報の提供ができたと思っっている。

また、『日本文化の基層を探る——ナラ林文化と照葉樹林文化』（一九九三）や、私の日本文化形成論の一つの到達点とい

このプレビューでは表示されないページがあります。

第八章 初期の照葉樹林文化論——一九七〇年代の論説

〔解説〕

本章の元になった「照葉樹林文化と稲作の系譜」は、上田正昭・佐々木高明・樋口隆康・上山春平・直木孝次郎（共著）の『古代史への視点』（一九七六）に収録された論文で、朝日ゼミナールでの講演録を加筆・修正したものである。これはさらに第一節「照葉樹林文化——その特色と伝来」と第二節「稲作文化の形成と照葉樹林文化」という二篇の論説から成るが、第一節が一九七五年十月三日、第二節が同年十月十七日の講演をもとにしたもので、本書ではそれぞれ一つの節として載録することとした。

一九七五年といえば、照葉樹林文化の大枠を設定した「続・照葉樹林文化——その特色と伝来」は、ごく初期の照葉樹林文化のまとめといえるものである。照葉樹林文化論の概要は、すでにその段階で一応は提示されているようである。

また、第二節「稲作文化の形成と照葉樹林文化」は、当時としては最先端の稲作起源論であった渡部忠世氏の「雲南・アッサム起源説」を、同学説が広く知られるようになる同氏の『稲の道』（一九七七）の刊行に先立って紹介したもので、そこでは「初期の稲作は焼畑や原初的な水田で水陸未分化な古いタイプの粗放な形で栽培するものであり、この形態の稲作は照葉樹林文化の一部として理解できる。これに対し、華北の先進農業地帯からの影響その他により、畦畔で区画され、灌漑水施設をもつような整った水田が形成されるようになる。その段階で稲作の経済的・社会的役割が非常に大きくなり、『稲作文化』が成立する」という考えをすでに示している。つまり粗放な原初的な稲作を営む照葉樹林文化の一部を構成する初期の稲作を基礎とし、集約的な水田稲作が後に形成され、その成立を契機に稲作文化が形成されたと

このプレビューでは表示されないページがあります。

第九章 ナラ林文化をめぐって

〔解説〕

日本文化のルーツを考えるに当たり、照葉樹林文化などに象徴される南からの文化とともに、北からの文化が重要な役割を演ずることはかなり早くから気づいていた。『稲作以前』（一九七二）を書いた段階でも、その点には気づいていて「北方系農業の流れ」という小見出しを設けて、東北アジアからの農耕文化の影響のあったことを指摘したが、当時の研究レベルでは、それを詳しく論証するまでには至らなかった。

この面での研究に一つの進展がみられたのは、一九八〇年に民博で行われた「農耕文化の源流」のシンポジウムであった。このシンポジウムを主宰した私は、中尾佐助博士にもっとも得意とされる照葉樹林帯の農耕ではなく、むしろ「北の農耕」も考察の範囲に含めた「東アジアの農耕とムギ」という題で発表を依頼した。その結果、東アジアの稲作農耕の特色とともに、シベリア・アーク、チベット・アークなど北方系のムギ作農耕の展開が話題とされ、それらをまとめる形で、このシンポジウムの総合討論の冒頭で「ナラ林文化の提唱」という、かなり長い発言が行われた。

本章に採録した第一節「ナラ林文化」は、この中尾さんの「ナラ林文化の提唱」の発言を受け、私が『月刊みんぱく』八巻九号（一九八四）にナラ林文化の特色の概要を示したもので、「ナラ林文化」についての独立の論説としては、最初のものである。その後、『日本史誕生』（一九九一）や『日本文化の基層を探る——ナラ林文化と照葉樹林文化』（一九九三）などの中でも、それぞれナラ林文化の特色について論じているが、ナラ林文化についての本格的な論考として発表したのが本章に収録した第二節「ナラ林文化考——東北アジアの基層文化の文化生態学」と第三節「二つのナラ林帯とその文化史

このプレビューでは表示されないページがあります。

第十章 根菜農耕文化論の成立と展開——オセアニア・東南アジアの文化史復元への寄与

〔解説〕 根菜農耕文化論の成立と展開

旧世界における農耕の起源を、オリエントに発生した中・大型有蹄獣の飼育と有機的に結合したムギ作農耕に求めた従来の学説に対し、中尾佐助氏の提起した旧世界の農耕起源論は、「ムギ作農耕」のほかに、アフリカやインドのサバンナに起源する多種類の雑穀類を栽培する「雑穀農耕」、及び主として東南アジアの熱帯森林地域で起源した栄養繁殖作物を主作物とする「根菜農耕」の二つの農耕の大類型の存することを主張したものである。つまり、雑穀農耕と根菜農耕が、それぞれ独立に起源し、特有の発展をとげたことを強く主張した点に、中尾学説の大きな特色がある。そのことを、私は「根菜農耕と雑穀農耕の発見——中尾佐助博士の農耕文化の大類型区分をめぐって」(『農耕の技術と文化』十七号、一九九四)で、詳しく触れたので、詳細はそれに譲りたい。

ここで問題になるのは、中尾氏が新たに示した農耕の大類型のうち、雑穀農耕については、アフリカのサバンナ地帯に起源する数多くの雑穀類について、J・ハーランらを中心に、その調査・研究がすすめられ、その農耕起源のとりまとめが行われている [Harlan, 1972, 1975; Harlan, Dewet and Semler (eds), 1976]。また、インドから中央アジアにかけての半乾燥地域や東アジアの雑穀農耕とその起源に関しては、阪本寧男氏をはじめ、河瀬眞琴、山口裕文、木俣美樹男氏らを中心とした人々たちによる調査・研究が進められ(例えば阪本、一九九一、山口・河瀬、二〇〇三など)とくにアワとキビについては「中央アジア—アフガニスタン—インド西北部を含む地域で、おそらく紀元前五〇〇〇年以前に栽培化され、この地域よりユーラシア大陸を東と西へ漸次伝播し、その過程で各地域に適応した地方品種群が成立した可能性が高

このプレビューでは表示されないページがあります。

第三部 日本の山村文化

第十一章 モンスーンアジアの焼畑農耕民社会における狩猟

——『後狩詞記』の背景をめぐる比較民族学

【解説】

平成二十一年（二〇〇九）六月五日、「柳田國男『後狩詞記』のちのちのち出版百周年記念シンポジウム」が、法政大学国際日本学研究所の主催で行われた。それを企画・立案したのは、同研究所特任教授のヨーゼフ・クライナー氏。同教授とは古い友人である私は、要請されるままシンポジウムで「焼畑農民の狩猟——今も焼畑とイノシシ狩りの行われる台湾山地民との比較から」という発表（長い副題は『後狩詞記』の副題にならった）を行ったが、その発表原稿に大きく手を入れてまとめたのが、本章であり、同シンポジウムの成果をとりまとめたヨーゼフ・クライナー（編）『日本民族の源流を探る——柳田國男『後狩詞記』再考』（二〇一三）に収められている。

明治四十一年はじめて椎葉村を訪れた柳田國男は、そこで「今も行はる、猪狩の故實」を発見し、深く心を動かされた。しかし、比較民族学の立場からみると、南九州の山村で営まれていた「猪狩の故實」は必ずしも珍しいものではない。モンスーン・アジアの焼畑農耕民社会では、男たちによる狩猟活動は今も好んで営まれ、ここでは焼畑の豊凶を占う儀礼的狩猟をはじめ、狩猟という営為の深層の部分に呪術的・象徴的性格が色濃く認められる例が少なくない。そのことを、本章では台湾や北部インドの自身の調査例にもとづいて実証した。そうした狩猟の特色は、北方の落葉広葉樹林帯や針葉樹林帯のそれとかわめて対照的な特徴を示すものである。

ところで、明治四十一年、椎葉の山村で「猪狩の故實」を見出した柳田國男は、同年秋に佐々木喜善と出会い、岩手

このプレビューでは表示されないページがあります。

第十二章 ヒエ栽培についての二つの覚書

〔解説〕 ヒエを主作物とする焼畑とヒエ穂の火力乾燥

「ヒエ(*Echinochloa utilis*)は特徴の著しい雑穀(millet)である」。その理由の第一は、ヒエは日本列島——とくに北海道西南部から東北地方北部の地域を中心に、縄文時代前期後半ごろからその栽培が始まったと想定され「吉崎、一九九七」、その分布が日本列島とその周辺に限られている。そのためヒエは日本列島で栽培化された数少ない作物の一つである可能性が大きく「阪本、一九八八」、そういう意味でヒエは日本固有の古い穀物だといえることができる。

ヒエには作物としてのいくつかの特色がある。その一つは、イネやアワなどに比べ、ヒエは低温下でも発芽力が強く、よく登熟する耐寒性のきわめて高い作物で、比較的粗放な条件でも栽培できること。また、一般には他の雑穀と同様、畑地に播種して栽培されるが、ときには苗をつくって移植したり、ときには水田にも栽培することができる。さらにイネやコムギのように、ヒエの穎果(穀粒)は穎の部分から容易に剥脱しない。つまりヒエは脱稈が容易ではなく、脱穀・搗精作業に大へん手間がかかるといふ欠点も有している。

このうち第一の点については、伝統的な農耕の特色がまだよく継承されていた明治初年のヒエとアワの分布をみると(明治一〇年『全国農産表』による)表1の如くで、アワが九州の畑作地域に広く分布していたのに対し、ヒエは冷害常習地帯ある北上山地(陸中・陸奥・陸前)をはじめ、北関東の畑作地帯(武蔵・下野・上野・常陸)から中部山間地帯(信濃・美濃・甲斐)に、その生産が集中し、気候の冷涼な東北日本の地域で、全国のヒエの生産量の約七〇%を占めていた。

これらのヒエは、おもに常畑耕地で栽培されていたようで、とくに生産量の多い北上山地では、五月上旬に畠地にヒ

このプレビューでは表示されないページがあります。

第十三章 山民の生業と生活・その生態学的素描——白山麓と秋山郷

〔解 説〕

国立歴史民俗博物館では、昭和五十六年に創設された直後から、いくつかの共同研究のプロジェクトが立ちあげられた。当時、民俗研究部長であった坪井洋文氏を代表とする「畑作農村の民俗誌的研究」もその一つで、「日本民族文化」社会を畑作農耕を軸とした視点から調査・分析し、非稲作村落である畑作を軸とする村落の生活様式の独自性を抽出し、その民俗を体系的に捉えること」を目的とするものであった。この共同研究は昭和六十年度に終了し、『国立歴史民俗博物館研究報告第18集』（一九八八年三月刊）が、その成果報告書にあてられることになり、その総論の一部として一九八六年に執筆したのが、この「山民の生業と生活・その生態——白山麓と秋山郷」である。

坪井さんと私は同じ世代で、昭和三十年代初め頃からのお付き合いがあり、日本文化の基層には稲作を基軸とする文化のほかに、畑作を基軸とする非稲作文化が存在するに違いないという問題意識をともに抱いて研究の交流をすすめてきた。私の『稲作以前』（一九七二）、坪井さんの『イモと日本人』（一九七九）は、こうした問題意識を実証すべくまとめたものだが、私たちの新しい考えは、日本文化に稲作文化論の大きな伝統の前に、当時なお学界では少数意見に過ぎなかった。坪井さんが主宰した共同研究は、そうした状況の中で、非稲作村落の生活様式の独自性を見出し、従来よく研究されてきた水田稲作村落のそれと対比し、非稲作村の民俗的（文化的）特色を明らかにすることをめざしたものである。

私の報告論文は、私自身が長年に亘り調査してきた白山山麓の村々のデータと十九世紀初期の貴重な民俗採訪録であ

このプレビューでは表示されないページがあります。

文 献

* 著者自身の文献は後掲「佐々木高明著作目録」に掲載した。

日本語文献

- アイヌ文化保存対策協議会(編)、一九七〇『アイヌ民俗誌』、第一法規出版。
 青葉 高、一九八一『野菜——在来品種の系譜』、法政大学出版局。
 ——一九八八『野菜の系譜——地方品種の来た道』、佐々木高明・松山利夫(編)『畑作文化の誕生——縄文農耕論へのアプローチ』、日本放送出版協会。
 赤澤 威・南川雅男、一九八九『炭素・窒素同位体に基づく古代人の食生活の復元』、『新しい研究法は考古学になをもたらしめたか』、クバプロ。
 秋篠宮文仁(編著)、二〇〇〇『鶏と人——民族生物学の視点から』、小学館。
 秋葉 隆、一九三七『オロチョン民具解説——大興安嶺東南部オロチョン族踏査報告(3)』、『民族学研究』、三巻一号。
 秋道智彌、一九九〇『狩猟』、大林太良・杉田繁治・秋道智彌(編)『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』、国立民族学博物館。
 天野 武、一九七三『白山山麓の焼畑耕作と民具』、『民具マンスリー』、六巻四号。
 ——一九七三(a)『狩猟』、石川県立郷土資料館『白山麓——民俗資料緊急調査報告書』。
 ——一九七三(b)『手工諸職(白峰村)』、石川県立郷土資料館『白山麓——民俗資料緊急調査報告書』。
 網野善彦、一九八〇『日本中世の民衆像——平民と職人』、岩波書店。
 アルサーニエフ・長谷川四郎(訳)、一九六五『デルスウ・ウザーラ——沿海州探検行』(東洋文庫55)、平凡社。
 安藤広太郎、一九五一『日本古代稲作史雑考』、地球出版。
 石井克己、一九九〇『黒井峯遺跡(群馬県子持村)』、『古墳時代の研究2 集落と豪族居館』、雄山閣出版。
 石川県立郷土資料館、一九七三『白山麓』、民俗資料緊急調査報告書、四号。
 石川恒太郎(編)、一九六〇『椎葉村史』、椎葉村。

- 石川日出志、一九九二「関東台地の農耕村落」、『新版古代日本8 関東』、角川書店。
- 石毛直道、一九七八「ハルマヘラ島・ガララ族の食生活」、『国立民族学博物館研究報告』、三卷二号。
- 石毛直道(編)、一九八五『論集 東アジアの食事文化』、平凡社。
- 石田英一郎、一九五八『日本民族の起源』、平凡社。
- 一九六一「永遠の日本人——日本民族文化の起源論によせて」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 一九六三「偉大な未完成——柳田における国学と人類学」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 一九六七「歴史民族学の限界——日本民族文化起源論をめぐって」、『文化人類学ノート(新版)』、ペリカン社(後に『石田英一郎全集4』、筑摩書房、一九七〇に所収)。
- 一九六九「日本文化論」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 一九六一「永遠の日本人——日本民族文化の起源論によせて」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 一九六三「偉大な未完成——柳田における国学と人類学」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 一九六九「日本文化論」、『石田英一郎全集3』(一九七〇)、筑摩書房。
- 石田英一郎(編)、一九六六『シンポジウム 日本国家の起源』、角川書店。
- 石田英一郎・泉 靖一(編)、一九六八『シンポジウム 日本農耕文化の起源』、角川書店。
- 石田英一郎・岡 正雄・江上波夫・八幡一郎、一九四九「日本民族Ⅱ文化の源流と日本国家の形成」、『民族学研究』、一三卷三号(後に『日本民族の起源』、平凡社、一九五八に所収)。
- 一九五八『日本民族の起源——対談と討論』、平凡社。
- 泉 靖一、一九三七「大興安嶺東南部オロチオン族踏査報告」、『民族学研究』、三卷一号。
- 今西錦司・吉良竜夫、一九五三「生物地理」、福井英一郎(編)『自然地理Ⅱ(新地理学講座4卷)』、朝倉書店。
- 今村啓爾、二〇〇一「狩猟採集生活の時代」、『原史東南アジア世界(岩波講座東南アジア史1)』、岩波書店。
- 岩田慶治、一九六六「日本文化のふるさと——東南アジアの稲作民族をたずねて」、角川書店。
- 岩手県立博物館(編)、一九八九『岩手の雑穀——北部北上山地にコメ以前の文化を探る』、(財)岩手県文化振興事業団。
- 印東道子、一九九九「オセアニアの食物調理法」、中尾佐助・秋道智彌(編)『オーストロネシアの民族生物学』、平凡社。
- 印南敏秀・神野善治・佐藤賢治・中村ひろ子(編)、二〇〇二『もの・モノ・物の世界——新たな日本文化論』、雄山閣。

- 上田正昭、一九七六『倭国の世界』講談社現代新書4233、講談社。
- 上田正昭・佐々木高明・樋口隆康・上山春平・直木孝次郎(共著)、一九七六『古代史への視点』朝日新聞社。
- 上山春平(編)、一九六九『照葉樹林文化——日本文化の深層』、中央公論社。
- 上山春平・佐々木高明・中尾佐助、一九七六『続・照葉樹林文化——東アジア文化の源流』、中央公論社。
- 江上波夫、一九六七『騎馬民族国家——日本古代へのアプローチ』(中公新書)、中央公論社。
- 江口 司、二〇〇八『柳田國男を歩く——肥後・奥日向路の旅』、現代書館。
- NHKスペシャル「日本人」プロジェクト(編)、二〇〇一―二〇〇二『日本人はるかな旅』(全五巻)、日本放送出版協会。
- エバーハルト・白鳥芳郎(監訳)、一九八七『古代中国の地方文化——華南・華東』、六興出版。
- 江間三枝子、一九七五『飛騨白川村』、未來社。
- 江守五夫、一九八六『日本の婚姻——その歴史と民俗』、弘文堂。
- 一九九〇『家族の歴史民族学——東アジアと日本』、弘文堂。
- 大島暁雄、一九七三『五木村の焼畑耕作と用具』、『民具マンスリー』、六巻四号。
- 大塚柳太郎、一九八四『パプア低地・ギデラ族の栄養と適応』、白石秀夫・鈴木継美(編)『栄養生態学——世界の食と栄養』、恒和出版。
- 大塚和義、一九八八『草原と樹海の民——中国・モンゴル・草原と大興安嶺の少数民族を訪ねて』、新宿書房。
- 大林太良、一九六一(a)『日本神話の起源』、角川書店。
- 一九六一(b)『フィリピンにおけるタロ芋栽培——フィリピンに塊茎類栽培文化は存在したか?』、『東洋文化研究所紀要』、二二三。
- 一九七三『稲作の神話』、弘文堂。
- 一九七七『邪馬台国——入墨とポンチヨと卑弥呼』、中央公論社。
- 一九七九『日本民族起源論と岡正雄学説』、岡 正雄(編)『異人その他』、言叢社。
- 一九八四『東アジアの王権神話——日本・朝鮮・琉球』、弘文堂。
- 一九八六(a)『日本神話の系譜——日本神話の源流をさぐる』、青土社。
- 一九八六(b)『歴史民族学(文化史)』、日本民族学会(編)『日本の民族学1964〜1983』、弘文堂。

- 一九九〇『東と西・海と山——日本の文化領域』、小学館。
- 一九九一(a)『北方の民族と文化』、山川出版社。
- 一九九一(b)『広域間の移動——大語族の移動』、岡 正雄・江上波夫・井上幸治(編)『民族とは何か』、山川出版社。
- 一九九二『正月の来た道——日本と中国の新春行事』、小学館。
- 一九九六『日本民族の起源』、ヨーゼフ・クライナー(編)『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』、新曜社。
- 一九九九『オーストロネシアの文化複合』、中尾佐助・秋道智彌(編)『オーストロネシアの民族生物学』、平凡社。
- 大林太良(編)、一九九四『異人その他(岡正雄論文集)』、岩波書店(岩波文庫)。
- 大林太良・杉田繁治・秋道智彌(編)、一九九〇『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』、国立民族学博物館。
- 岡 正雄、一九五六『日本民族文化の形成』、『図説日本文化史大系 第1巻』、小学館(後に『異人その他』一九七九に所収)。
- 一九五八(a)『二十五年の後に』、石田英一郎・江上波夫・岡 正雄・八幡一郎『日本民族の起源——対談と討論』、平凡社(後に『異人その他』一九七九に所収)。
- 一九五八(b)『日本文化の基礎構造』、『日本民俗学大系 第2巻』、平凡社(後に『異人その他』一九七九に収録)。
- 一九七九『異人その他——日本民族Ⅱ文化の源流と日本国家の形成』、言叢社。
- 奥田或・岡田謙・野村陽一郎、一九四一『紅頭嶼ヤミ族の農業』、太平洋協会(編)『大南洋——文化と農業』、河出書房。
- 尾口村史編纂専門委員会(編)、一九七九、一九八一『石川県尾口村史』、第二巻、第三巻、尾口村役場。
- 小野重朗、一九七〇『農耕儀礼の研究——南九州における発生と展開』、弘文堂。
- 笠原安男、一九七九『雑草の歴史』、沼田真(編)『雑草の科学』、研成社。
- 一九八〇『埋蔵種子分析による古代農耕の検証』、古文化財編集委員会(編)『考古学・美術史の自然科学的研究』、日本学術振興会。
- 一九八二『出土種子からみた縄文・弥生期の稲作』、『歴史公論』、八巻一号。
- 一九八三『鳥浜貝塚(第六次発掘)の植物種子の検出と同定について』、鳥浜貝塚研究グループ(編)『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査3』、福井県教育委員会・若狭歴史博物館。
- 一九八四(a)『埋蔵種子分析による古代農耕の検証(2)——菜畑遺跡の作物と雑草の種類および渡来経路』、古文化財編

集委員会(編)『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。

——一九八四(b)「鳥浜貝塚(第七次発掘)の植物種子の検出と同定——とくにアブラナ類とカジノキおよびコウゾの同定」、鳥浜貝塚研究グループ(編)『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4』、福井県教育委員会・若狭歴史博物館。

——一九八四(c)「鳥浜貝塚(第六・七次発掘)のアサ種実の同定について」、鳥浜貝塚研究グループ(編)『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査4』、福井県教育委員会・若狭歴史博物館。

笠原安夫・武田満子、一九七九「岡山県津島遺跡の出土種実の種類同定の研究——日本各地遺跡間の残存種実の比較とそれから見た農耕の伝播と形態の推定」、『農学研究』、五八卷三・四号。

片山一道、二〇〇二『海のモンゴロイド——ポリネシア人の祖先を求めて』、吉川弘文館。

加藤九祚(編)一九八四『日本のシャマニズムとその周辺——日本文化の原像を求めて2』、日本放送出版協会。

加藤定子、一九八九「シベリアの衣服——ナナイ(族)の魚皮衣を中心に」、『古代日本海域の謎II——海からみた衣と装いの文化』、新人物往来社。

加藤晋平、一九七八〜一九八〇「北方農耕覚書——縄文農耕・北の視点(⑥⑦⑧⑨)」、『季刊どるめん』、一九・二一・二二・二四・二五号。

——一九八〇「縄文人の動物飼育——とくにイノシシの問題について」、『歴史公論』、六卷五号。

——一九八五「シベリアの先史文化と日本」、六興出版。

——一九八八「シベリアの先史農耕と日本への影響」、佐々木高明・松山利夫(編)『畑作文化の誕生——縄文農耕論へのアプローチ』、日本放送出版協会。

——一九八九「東北アジアの自然と人類史」、三上次男・神田信夫(編)『東北アジアの民族と歴史』、山川出版社。

加藤助参、一九三五「白山々麓に於ける出作の研究」、『京大農業経済論集第一輯』。

加藤惣吉、一九七三「生産・生業(白峰村)(尾口村)」、石川県立郷土資料館『白山麓——民俗資料緊急調査報告書』。

金関丈夫、一九五五「八重山の古代文化」、『民族学研究』、一九卷二号。

蒲生正男ほか、一九七〇「シンポジウム・岡学説と日本民族II文化の系統起源論の現段階」、『民族学からみた日本(岡正雄教授古稀記念論文集)』、河出書房新社。

唐津市教育委員会(編)、一九八二『菜畑遺跡——唐津市菜畑字松円寺所在の縄文・弥生時代稲作遺跡の調査』、『菜畑遺跡——唐津市菜畑字松円寺所在の縄文・弥生時代稲作遺跡の調査(分析・考察編)』、唐津市教育委員会。

菊地俊彦、一九七六『オホツク文化に見られる鞆鞆・女眞系遺物』、『北方文化研究』、一〇巻。

君島久子(編)、一九八九『日本民間伝承の源流——日本基層文化の探求』、小学館。

金芳漢、一九八五『韓国語と日本語の關係』、馬淵和夫(編)『日本語の起源』、武蔵野書院。

金元龍・西谷正(訳)、一九八四『韓国考古学概説(増補改訂版)』、六興出版。

金田章裕、一九八五『条里と村落の歴史地理学的研究』、大明堂。

熊谷治、一九八四『東アジアの民俗と祭儀』、雄山閣出版。

熊倉功夫・杉山公男・榛村純一、一九九九『緑茶文化と日本人』、ぎょうせい。

熊本県教育委員会、一九七四『五家荘の民俗』、熊本県教育委員会。

クライナー、J、一九九六『日本民族学・文化人類学の歴史』、ヨーゼフ・クライナー(編)『日本民族学の現在——1980

年代から90年代へ』、新曜社。

クライナー、J(編)、二〇一二『日本民族の源流を探る——柳田國男『後狩詞記』再考』、三弥井書店。

黒潮文化の会(編)、一九七八『黒潮列島の古代文化』、角川書店。

黒田日出男、一九八三『中世農業技術の諸相』、『講座日本技術の社会史1』、日本評論社。

幸田清喜、一九五六『白山の作り』、『現代地理講座2』、山地の地理』、平凡社。

甲元眞之、一九九〇『燕の成立と東北アジア』、田村晃一(編)『東北アジアの考古学』、六興出版。

——一九九二『東北アジアの初期農耕文化』、横山浩一先生退官記念事業会(編)『横山浩一先生退官記念論文集Ⅱ 日本における初期弥生文化の成立』。

粉河昭平、一九七九『縄文時代の栽培植物』、『考古学と自然科学』、第二二号。

国分直一、一九七〇『日本民族文化の研究』(考古民俗叢書7)、慶友社。

——一九七六『環シナ海民族文化考』(考古民俗叢書15)、慶友社。

——一九九二『日本文化の古層——列島の地理的位相と民族文化』、第一書房。

国分直一・佐々木高明(編)、一九七三『南島の古代文化』、毎日新聞社。

後藤 直、一九八二「弥生文化成立期の朝鮮半島」、『歴史公論』、八巻一号。

——一九八四「朝鮮半島における稲作のはじまり」、『考古学ジャーナル』、No.228。

古文化財編集委員会(編)、一九八〇『考古学・美術史の自然科学的研究』、日本学術振興会。

——一九八四『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。

小山修三(編)、一九九二『狩猟と漁労——日本文化の源流をさぐる』、雄山閣出版。

阪本寧男、一九八四『雑穀類の系譜』、『歴史公論』、一〇巻六号。

——一九八八『雑穀のきた道——ユーラシア民族植物誌から』、日本放送出版協会。

——一九八九『ユーラシアのアワとキビの系譜』、『文明のクロスロード』、九巻一号。

阪本寧男(編)、一九九一『インド亜大陸の雑穀農牧文化』、学会出版センター。

崎山 理(編)、一九八六『越語資料』、国立民族学博物館。

——一九九〇『日本語の形成』、三省堂。

桜田勝徳、一九七四『美濃徳山村民俗誌』(初版一九五二)、『日本民俗大系第五巻』、角川書店。

佐々木章、一九八四「焼畑山地土壌のプラント・オパール分析——宮崎県椎葉村向山」、古文化財編集委員会(編)『古文化

財の自然科学的研究』、同朋舎。

——一九九八『おばあちゃんの山里日記』、葦書房。

佐々木史郎、一九八五「トナカイ飼育の歴史」、『民博通信』、二〇号。

——一九九一「アムール川流域とサハリンにおける文化類型と文化領域——レーヴィン、チェボクサロフの「経済・文化

類型」と『歴史・民族誌の領域』の再検討」、『国立民族学博物館研究報告』一六巻二号。

佐藤洋一郎、一九九二『稲のきた道』、裳華房。

佐藤洋一郎・藤原宏志、一九九二「イネの発祥中心地はどこか——これからの研究にむけて」、『東南アジア研究』、三〇巻一

号。

鹿野忠雄、一九四六(a)「インドネシアに於ける雑穀——特に稲粟耕作の先後問題」、『東南亜細亜民族学先史学研究』、矢

島書房。

——一九四六(b)「紅頭嶼ヤミ族の粟に関する農耕儀礼」、『東南亜細亜民族学先史学研究』、矢島書房。

上海市文物保管委員会、一九七八「オオムギの起源」、『週刊朝日百科世界の植物』、七二号。

白峰村史編集委員会(編)、一九五九『白峰村史』下巻、白峰村役場。

杉本尚次(編)、一九八四『日本のすまいの源流——日本基層文化の探求』、文化出版局。

鈴木牧之・宮 栄二(校注)、一九七一『秋山紀行・夜職草』(東洋文庫186)、平凡社。

住谷正男、一九七九『岡正雄「古日本の文化層」——或る素描』、岡 正雄『異人その他』、言叢社。

高取正男、一九六〇『古代の山民について』、『史窓』、一六(民間信仰史の研究)、法藏館、一九八二に所収。

高橋隆平、一九四七『大麦品種の分類と地理的分布に関する研究第15報』、『農学研究』、三九巻。

高橋隆平・山本二郎、一九五一『大麦品種の分類や地理的分布に関する研究第15報——小穂脱落型と栽培大麦の系統発生』、『農学研究』、三九巻三三三。

『農学研究』、三九巻三三三。

高橋隆平、一九七七『オオムギの起源』、『週刊朝日百科世界の植物72文化を生んだ栽培植物』、朝日新聞社。

高橋 護、一九九二『縄文時代の粉痕土器』、『考古学ジャーナル』、No.355。

高橋九一、一九七〇『稗つくりの民具』、『民具マンスリー』、三巻九号。

高谷好一、一九八五『東南アジアの自然と土地利用』、勁草書房。

竹井恵美子・小林央往・阪本蜜男、一九八一『紀伊山地における雑穀の栽培と利用ならびにアワの特性』、『季刊人類学』、

一二巻四号。

武田 明、一九五五『祖谷山民俗誌』、古今書院。

竹村卓二(編)、一九八六『日本民俗社会の形成と発展——イエ・ムラ・ウジの源流をさぐる』、山川出版社。

橘 礼吉、一九七三『住生活(白峰村)』、石川県立郷土資料館『白山麓——民俗資料緊急調査報告書』。

——一九七五『白山麓出作り住居の原型ネプキ小屋について(一)(二)』、『加能民俗研究』、三・四号。

——一九七七『白山麓小原 生活と民具(雑燭慣行の部)』、自家出版。

——一九八二『白山麓の焼畑における雑穀収量——白峰村桑島杉田敏雄家の事例』、『加能民俗研究』、一〇号。

——一九八三『白山麓の焼畑地域における雑穀料理(一)』、『加能民俗研究』、一一号。

——一九八四『白山麓の焼畑地域における雑穀料理(二)——石川県白峰村とその周辺のアワ・カマシ料理』、『加能民俗研

究』、一一二号。

- 一九九五『白山麓の焼畑農耕——その民俗学的生態誌』、白水社。
- 田中啓爾・幸田清喜、一九二七『白山山麓に於ける出作地帯』、『地理学評論』、三卷四・五号。
- 田村晃一、一九八九『中国東北地方の歴史と文化——先史・古代』、三上次男・神田信夫(編)『東北アジアの民族と歴史』、山川出版社。
- 一九九〇『高句麗の積石塚』、田村晃一(編)『東北アジアの考古学』、六興出版。
- 千葉徳爾、一九六六『民俗と地域形成』、風間書房。
- 中国社会科学院考古学研究所(編著)・関野 雄(監訳)、一九八八『新中国の考古学』、平凡社。
- 塚田松雄、一九七四『花粉は語る——人間と植生の歴史』、岩波講座。
- 都出比呂志、一九八九『日本農耕社会の成立過程』、岩波書店。
- 坪井洋文、一九七九『イモと日本人——民俗文化論の課題』、未来社。
- 一九八二『稲を選んだ日本人——民俗的思考の世界』、未来社。
- 一九八六『民俗再考——多元的世界への視点』、日本エディタースクール出版部。
- 寺澤 薫、二〇〇〇『王権誕生(日本の歴史②)』、講談社。
- トゥコルク、B・A・斉藤(二訳)、一九八一『トナカイに乗った狩人たち——北方ツングース民族誌』、刀水書房。
- 外山秀一、二〇〇六『遺跡の環境復原——微地形分析、花粉分析、プラント・オパール分析とその応用』、古今書院。
- 鳥浜貝塚研究グループ(編)、一九七九『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡調査①』、福井県教育委員会。
- 一九八〇～一九八七『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡調査②～⑥』、福井県教育委員会。
- 直木孝次郎、一九七三『倭国の誕生(日本の歴史①)』、小学館。
- 中尾佐助、一九六六『栽培植物と農耕の起源』、岩波書店。
- 一九六七『農業起原論』、森下正明・吉良竜夫(編)『自然——生態学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集①)』、中央公論社。
- 一九七二『料理の起源』、日本放送出版協会。
- 一九八三『東アジアの農耕とムギ』、佐々木高明(編)『日本農耕文化の源流』、日本放送出版協会。
- 中尾佐助・秋道智彌(編)、一九九九『オーストロネシアの民族生物学——東南アジアから海の世界へ』、平凡社。

中尾佐助・佐々木高明、一九九二『照葉樹林文化と日本』、くもん出版。

中川原捷洋、一九八五『稲と稲作のふるさと』、古今書院。

中村慎一、一九八六「長江下流域新石器文化の研究——栽培システムの進化を中心に」、『東京大学文学部考古学研究室紀要』、五号。

中村 純、一九六七『花粉分析』、古今書院。

——一九八〇『花粉分析による稲作史の研究』、古文化財編集委員会(編)『考古学・美術史の自然科学的研究』、日本学術振興会。

——一九八二『花粉分析からみた縄文から弥生』、『歴史公論』、八巻一号。

——一九八四『古代農耕とくに稲作の花粉分析学的研究』、古文化財編集委員会(編)『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。

名久井芳枝、一九八六、『実測図のすすめ』、一芦舎。

那須孝梯、一九八一「縄文人は栽培ソバを食べた?」、『科学朝日』、四一巻六号。

西田龍雄、一九七八「チベット・ビルマ語と日本語」、『岩波講座日本語12』、岩波書店。

——一九八〇「チベット語・ビルマ語と日本語」、大野晋(編)『日本語の系統』(現代のエスプリ別冊)。

西田正規、一九八〇「縄文時代の食糧資源と生業活動——鳥浜貝塚の自然遺物を中心として」、『季刊人類学』、一一巻三号。

——一九八二「縄文時代の人間・植物関係——食糧生産の出現過程」、『国立民族学博物館報告』、六巻二号。

新田栄治、一九九五「東南アジアの農耕の起源」、梅原猛・安田喜憲(編)『農耕と文化(講座文明と環境第3巻)』、朝倉書店。

日本考古学協会(編)、一九六一『日本農耕文化の生成』。

野本寛一、二〇〇四『山地母源論1——日向山峡のムラから』、岩田書店。

萩原眞子、一九八九「アムール川・沿海州地域の人・生活・衣服」、森浩一(編)『古代日本海域の謎II——海からみた衣と装いの文化』、新人物往来社。

——一九八九「民族と文化の系譜」、三上次男・神田信夫(編)『東北アジアの民族と歴史』、山川出版社。

橋本征治、二〇〇二『海を渡ったタロイモ——オセアニア・南西諸島の農耕文化論』、関西大学出版部。

橋本萬太郎、一九七八『言語類型地理論』、弘文堂。

- 一九八三「ことばと民族」、橋本萬太郎(編)『漢民族と中国社会(民族の世界史5)』、山川出版社。
- 橋本萬太郎・鈴木秀夫、一九八三「漢字文化圏の形成」、橋本萬太郎(編)『漢民族と中国社会(民族の世界史5)』、山川出版社。
- 畑井弘、一九八一「律令・荘園体制と農民の研究——焼畑・林田農業と家地経営」、吉川弘文館。
- 埴原和郎(編)、一九九三『日本人と日本文化の形成』、朝倉書店。
- 早川孝太郎、一九七七「花祭(後篇)」、『早川孝太郎全集第二卷』、未来社。
- 原田信男、一九八五「日本中世における肉食について——米社会との関連から」、石毛直道(編)『東アジアの食事文化』、平凡社。
- 二〇〇五「日本の田畑と焼畑について」、『季刊東北学——特集〈稲作以前〉再考』、二期二号。
- 春成秀爾、一九九〇『弥生文化の始まり』、東京大学出版会。
- 一九九五「熊祭りの起源」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、60。
- 樋口清之、一九七五「古墳文化と大和政権」、林屋辰三郎ほか(編)『歴史の視点』、日本放送出版協会。
- 樋口隆康、一九七一「日本人はどこから来たか」、講談社。
- 広瀬和雄、一九九一「耕地と灌漑」、『古墳時代の研究4』、雄山閣出版。
- 福井勝義、一九七四「焼畑のむら」、朝日新聞社。
- 福田アジオ、一九八八「近世初期山村一揆論——北山・椎葉山・祖谷山」、『国立歴史民俗博物館研究報告』、18。
- 二〇一二「世界民俗学構想と遠野物語」、『歴史と民俗・神奈川大学日本常民研究所論文集』、28。
- 福本雅一、一九七八「臨海水土志訳注稿」、国分直一(編)『論集・海上の道』、大和書房。
- 藤 則雄、一九八四「過去二万年における沖積低地の古環境変遷」、古文化財編集委員会(編)『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。
- 藤井知昭(編)、一九八五「日本音楽と芸能の源流——日本文化の原像を求めて3」、日本放送出版協会。
- 藤下典之、一九八四「出土遺物よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」、古文化財編集委員会(編)『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。
- 藤原宏志、一九八二「プラント・オパールからみた縄文から弥生——縄文晩期から弥生初期における稲作の実証的研究」、『歴史公論』、八巻一号。

藤原宏志・松谷暁子・梅本光一郎・佐々木章、一九八〇「プラント・オパール分析法及び灰像法による古代植物遺物の研究」、
古文化財編集委員会(編)『考古学・美術史の自然科学的研究』、日本学術振興会。

古野清人、一九七二『高砂族の祭儀生活』、『古野清人全集第一巻』、三一書房。

文化庁文化財保護部(編)、一九九五『北上山地の畑作習俗』—無形の民俗文化財記録第三八集、国土地理協会。

文物編集委員会(編)、関野 雄(監訳)、一九八一『中国考古学三十年』、平凡社。

堀田 満、一九八三『イモ型有用植物の起源と系統』—東アジアを中心に、佐々木高明(編)『日本農耕文化の源流』、日本
放送出版協会。

堀田吉雄、一九八〇『山の神信仰の研究』(増補・改訂版)、光書房。

前川文夫、一九七三『日本人と植物』、岩波書店。

前田保夫、一九八〇『縄文の海と森』—完新世前期の自然史、蒼樹書房。

松谷暁子、一九八一『長野県大石遺跡で出土したタール状炭化種の同定について』、『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調
査報告書』。

——一九八四『走査顕像による炭化種実の識別』、古文化財編集委員会(編)『古文化財の自然科学的研究』、同朋舎。

——一九八八『ソ連ポリツェ文化出土の炭化粒』、佐々木高明・松山利夫(編)『畑作文化の誕生』—縄文農耕論へのアプ
ローチ、日本放送出版協会。

松永満夫、一九七七『大石遺跡アワ類似炭化種子』、『季刊どるめん』、一三三号。

松本 豪、一九七七『大石遺跡で発見された炭化種子について』、『季刊どるめん』、一三三号。

松本信広、一九七一『日本神話の研究』(東洋文庫180)、平凡社。

——一九七八〜七九『日本民族文化の起源』(全三冊)、講談社。

松山利夫、一九七二『トチノミとドングリ』—堅果類の加工法に関する事例研究、『季刊人類学』、三巻二号。

——一九七三『コライとタコトワン』—ルカイ族のサトイモ加工法、『季刊人類学』、四巻二号。

——一九七七『野生堅果類、とくにトチノミとドングリ類のアク抜き技術とその分布』、『国立民族学博物館研究報告』、
二巻三号。

——一九八二『木の実』、法政大学出版社。

- 一九八六『山村の文化地理学的研究——日本における山村文化の生態と地域構造』、古今書院。
- 馬淵東一、一九七四(a)「ブヌン族に於ける獣肉の分配と贈与」、『馬淵東一著作集第一卷』、社会思想社。
- 一九七四(b)「中部台湾および東南アジアにおける呪術的・宗教的土地所有権」、『馬淵東一著作集第二卷』、社会思想社。
- 一九七四(c)「粟をめぐる高砂族の農耕儀礼」、『馬淵東一著作集第三卷』、社会思想社。
- 三上次男、一九六六『古代東北アジア史研究(東北アジア史研究②)』、吉川弘文館。
- 三品彰英、一九七〇～七四『三品彰英論文集一～六卷』、平凡社。
- 宮本常一、一九六八『山に生きる人びと(日本民衆史②)』、未栄社。
- 一九七四『越前石徹白民俗誌』(初版一九二四)、『日本民俗誌大系第七卷』、角川書店。
- 民族文化映像研究所(編)、一九八六『西米良の焼畑』、西米良村教育委員会。
- 村上恭道、一九八七『東北アジアの初期鉄器時代』、『古代文化』、三九卷九号。
- 村松一弥(編訳)、一九七四『苗族民話集』、平凡社。
- 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班、一九八二『シンポジウム縄文農耕の実証性』。
- 安田喜憲、一九七九『花粉分析』、鳥浜貝塚研究グループ(編)『鳥浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1』、福島県教育委員会。
- 井県教育委員会。
- 一九八〇『環境考古学事始——日本列島二万年』、日本放送出版協会。
- 一九八三『堆積物の各種分析からみた最終氷期以降の気候変動』、吉野正敏(編)『気象研究ノート』一四七号(日本とその周辺の古気候復元)、四七～六〇。
- 一九八五『環日本海文化の変遷——花粉分析学の視点から』、『国立民族学博物館研究報告』第九卷四号。
- 一九八八『縄文時代の環境と生業——花粉分析の結果から』、佐々木高明・松山利夫(編)『畑作文化の誕生——縄文農耕論へのアプローチ』、日本放送出版協会。
- 安本美典、一九八五『日本語の起源を探る』、PHP研究所。
- 柳田國男、一九〇九『後狩詞記——日向国奈須の山村に於て今も行われる猪狩の故実』(『定本柳田國男集第二七卷』、一九六四、筑摩書房に所収)。
- 一九三四『民間伝承論』。

- 一九五二「海上への道」(一)、(二)、(三)、『心』、五卷一〇～一二号、平凡社。
- 一九五九「故郷七十年」、のちきく文庫(『定本柳田國男集別巻三』、一九六四に所収)。
- 一九六一「海上への道」、筑摩書房(『定本柳田國男集第一巻』、一九六三に所収)。
- 一九六二「稗の未来」、『定本柳田國男集第一四巻』、未來社。
- 柳田國男・安藤広太郎・盛永俊太郎、一九六九「稲の日本史 上・下」(復刻)、筑摩書房。
- 藪田嘉一郎、一九六八「白水郷考」、金関丈夫博士古希記念委員会(編)『日本民族と南方文化』、平凡社。
- 山口英男、一九九二「農耕生活と馬の飼育」、『新版古代日本8 関東』、角川書店。
- 山口裕文・河瀬眞琴(編著)、二〇〇三「雑穀の自然史——その起源と文化を求めて」、北海道大学図書刊行会。
- 山口弥一郎、一九七三「東北地方の稗」、『山口弥一郎選集第七巻』、世界文庫。
- 一九七四「二戸覚書」(初版：一九四三)、『日本民俗誌大系第九巻』、角川書店。
- 山崎純男、二〇〇七「弥生文化の開始——北部九州を中心に」、広瀬和雄(編)『弥生時代はどう変わるか』、学生社。
- 山田隆治、一九六九『ムンダ族の農耕文化複合』、風間書房。
- 山田亀太郎・ハルエ(述)、志村俊司(編)、一九八三『山と獵師と焼畑の谷——秋山郷に生きた獵師の詩』、白日社。
- 山田悟郎、一九九二「古代のソバ」、『考古学ジャーナル』、No.355。
- 山田悟郎・椿坂恭代、一九九五「大陸から伝播してきた栽培植物」、北海道開拓記念館(編)『北の歴史・文化交流事業・研究報告』、北海道開拓記念館。
- 吉崎昌一、一九九二「古代雑穀の検出——考古植物学的調査の展開」、『考古学ジャーナル』、No.355。
- 一九九五「日本における栽培植物の出現」、『季刊考古学』、五〇号。
- 一九九七「縄文時代の栽培植物」、『第四紀研究』、二六巻五号。
- 吉田集而、一九九〇「地炉石焼」、大林太良・杉田繁治・秋道智彌(編)『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』、国立民族学博物館。
- 一九九九「発酵パン果の謎」、中尾佐助・秋道智彌(編)『オーストロネシアの民族生物学』、平凡社。
- 吉田集而・堀田 満・印東道子(編)、二〇〇三『イモとヒト——人類の生存を支えた根栽農耕』、平凡社。
- 吉野正敏(編)、一九八三、「日本とその周辺的古気候復元」、『気象研究ノート』一四七号。

立命館大学探検部ボタン諸島學術調査隊(編著)、一九七一年『ボタン島の自然と文化——その調査と記録』、立命館大学探検部。
 劉茂源(編)、一九九六年『ヒト・モノ・コトバの人類学』、慶友社。

レーヴィン(著)、香山陽坪(訳)、一九六〇年『北シベリアおよび極東におけるソヴェートの民族誌的研究』、『民族学研究』、二四卷・二二号。

若林喜三郎、一九六二年『村民のはたらき』、白峰村史編集委員会(編)『白峰村史』上巻。

渡辺 誠、一九八四年『編布の歴史』、『染織』、四五号。

渡部忠世、一九七〇年『タイにおけるモチ稲栽培圏の成立』、『季刊人類学』、一卷二二号。

——一九七七『稲の道』、日本放送出版協会。

——一九八三年『アジア稲作の系譜——蓬萊米と在来米』、法政大学出版社。

渡部忠世・生田 滋(編)、一九八四年『南島の稲作文化——与那国島を中心に』、法政大学出版社。

外国語文献

雲南省歴史研究所、一九八〇年『雲南少数民族』。

董学增、一九八三年『試論吉林地区西团山文化』、『考古学報』、一九八三年第四期。

郭大順・馬沙、一九八五年『以遼河流域為中心的新石器文化』、『考古学報』、一九八五年第四期。

河北省文物管理处・邯鄲市文物保管所、一九八一年『河北武安磁山遺址』、『考古学報』、一九八一年第三期。

吳錦吉、一九八二年『江南幾何印文陶文化』、應是古代越人的文化』、百越民族史研究会(編)『百越民族史論集』、中国社会科学出版社。

江西省歷史博物館・貴溪県文化館、一九八〇年『江西貴溪崖墓發掘簡報』、『文物』、一九八〇年第一期。

黑龍江省文物考古工作隊、一九七九年『密山県新開流遺址』、『考古学報』、一九七九年第四期。

——一九八〇年『黑龍江肇源白金宝遺址第一次發掘』、『考古』、一九八〇年第四期。

——一九八二年『黑龍江寧安県鶯歌嶺遺址』、『考古』、一九八二年第六期。

瀋陽市文物管理弁公室、一九七八年『瀋陽新樂遺跡試掘報告』、『考古学報』、一九七八年第四期。

瀋陽市文物管理弁公室・瀋陽故宮博物館、一九八五年『瀋陽新樂遺址第二次發掘報告』、『考古学報』、一九八五年第二期。

- 浙江省文物管理委員會，一九六〇「吳興錢山漾遺址 第一、二次發掘報告」，《考古學報》，一九六〇年第二期。
- 張泰湘，一九八六「黑龍江省的原始社會考古學研究」，《史前研究》，一九八六年第一期。
- 中國社會科學院考古研究所內蒙古工作隊，一九八五「內蒙古敖漢旗興隆窪遺址發掘簡報」，《考古》，一九八五年第一〇期。
- 中國社會科學院考古研究所(編)，一九九一「中國考古學中碳十四年代數據集，1965-1991」，文物出版社。
- 中國植被編輯委員會(編著)，一九八〇「中國植被」，科學出版社。
- 斐安平，一九八九「彭頭山文化的稻作遺存與中國史前稻作農業」，《農業考古》，一九八九年第二期。
- 福建省博物館，一九七六「閩侯曇石山遺址第六次發掘報告」，《考古學報》，一九七六年第一期。
- 福建省博物館·崇安景文化館，一九八〇「福建崇安武夷山白岩崖洞墓清理簡報」，《文物》，一九八〇年第六期。
- 文物編輯委員會(編)，一九九〇「《文物考古工作十年 一九七九-一九八九》」，文物出版社。
- 李紹達，一九八〇「閩干磁山·斐李崗文化的幾箇問題——從莪溝北崗遺址緣起」，《文物》，一九八〇年第五期。
- 李友謀·薛文燠，一九九二「斐李崗文化」，中州古籍出版社。
- 遼寧省文物考古研究所，一九八六「遼寧牛河梁紅山文化·女神廟·與積石塚群發掘簡報」，《文物》，一九八六年第八期。
- Artschwager, E. and Brandes, E. W. 1958. Sugarcane: origin, classification, characteristics and description of representative clones. *USDA, Agr. Handb. No. 122.*
- Barran, J. 1958. Subsistence Agriculture in Melanesia. *Bernice P. Bishop Museum, Bulletin*, 219.
- Bayard, D. T. 1970. Excavation at Non Nok Tha, Northeastern Thailand, 1968: An Interim Report. *Asian Perspectives*, XIII.
- Bernatzik, H. A., 1947. *Akha und Mear: Probleme der angewandten Völkerverkunde in Hinterindien*. Wagner'sche Univ.-Buchdruckerei.
- Black, L., 1973. The Nivkh (Gilyak) of Sakhalin and Lower Amur. *Arctic Anthrop.* X-1.
- Burkitt, I. H. 1935. *A Dictionary of the Economic Products of the Malay Peninsula. I, II.* Crown Agents for Colonies.
- Clark, J. G. D., 1952. *Prehistoric Europe: The Economic Basics*. Cambridge University Press.
- , 1972. Star Carr: a case study in Bioarchaeology. *An Addison Wesley Module in Anthropology* 10.
- Conklin, H. C., 1957. *Hannuo Agriculture: A Report on an Integral System of Shifting Cultivation on Philippines*. F. A. O.
- , 1980. *Ethnographic Atlas of Iteqao: A Study of Environment, Culture and Society in Northern Luzon*. Yale University

- Press.
- Darty, H. C., 1956. The Clearing of the Woodland in Europe. In *Man's Role in Changing the Face of the Earth*, W. Thomas (ed.), The University of Chicago Press.
- Eberhard, W., 1968. *The Local Cultures of South and East China*. E. J. Brill.
- , 1977 (1st ed. 1955). *A History of China* (revised edition). University of California Press.
- Freeman, J. D., 1955. *Iban Agriculture: A Report on the Shifting Cultivation of Hill Rice by the Iban of Sarawak*. Her Majesty's Stationery Office.
- Fürer-Haimendorf, Ch., 1938. Through Unexplored Mountains of the Assam-Burma Border. *Geogr. Journ.* 91.
- Geddes, W. R., 1954. *The Land Dayaks of Sarawak: A Report on Social Economic Surveys of the Land Dayaks of Sarawak*. Her Majesty's Stationery Office.
- Harlan, J., 1972. Agricultural Origins: Centers and Noncenters. *Science* 174.
- , 1975. *Crops and Man*. American Society of Agronomy and Crop Science Society of America.
- Harlan, J., Dewet, J., and Stemler, A. (ed.), 1976. *Origins of African Plant Domestication*. Mouton Publishers.
- Heine-Geldern, R., 1923. Südostasien. In: Buschan, G. (Hrsg.), *Illustrierte Völkerkunde, II. Erster Teil*. Strecker und Schröder.
- Hutton, J. H., 1968 (1st published 1921). *Sema Naga*. Bombay: Oxford Press.
- Ishige, N., 1980. *The Galela of Halmahera (Senri Ethnological Studies No. 7)*. National Museum of Ethnology, Osaka.
- Izkowitz, K. G., 1951. *Lamet: Hill Peasants in French Indochina*. Ethnografiska Museet, Göteborg.
- Kaufman, H.-E., 1934. Landwirtschaft beiden Bergvölkern von Assam und Nord-Burma. *Zeit. F. Ethnologie* 66.
- Koyama, S., 1978. Jomon Subsistence and Population. *Senri Ethnological Studies*, No. 2.
- Kroeber, A. L., 1938. *Cultural and Natural Areas of Native North America*. University of California Publication in American Archaeology and Ethnology, Vol. 38, University of California Press.
- , 1939. *Cultural and Natural Areas in Native North America*. University of Calif. Press.
- Kruyt, N. A. and Kruyt, A. C., 1970. *The Baré Speaking Tradeja of Central Celebes (Eastern Tradeja)*, 3rd Volume. J. K. Moulton, Trans., New Heaven, Human Relation Area.
- Kunstadter, P., 1978. Subsistence Agricultural Economies of Luá and Karen Hill Farmers, Mae Sariang District Northwestern Thailand. In *Farmers in the Forest: Economic Development and Marginal Agriculture in Northern Thailand*. P.

- Kunstadter, E., Chapman, C. and Sabhasri, S. (eds.), *The University Press of Hawaii Laboratory of Quaternary Palynology and Laboratory of Radiocarbon*. Kweiyang Institute of Geochemistry, Academia Sinica, 1978. Development of Natural Environment in the Southern Part of Liaoning Province during the Last 10,000 Years, *Scientia Sinica*, XXI (4) : 516-532.
- Levin, M. G. and Potapov, L. P. (ed.), 1956. *The Peoples of Siberia*. University of Chicago Press.
- Mills, J. P., 1937. *Rengma Naga*. Bombay, Oxford University Press.
- Murdock, G. P., 1959. *Africa, its Peoples and Their Culture History*. McGraw Hill.
- , 1968. The Current Status of the World's Hunting and Gathering Peoples. In Lee, R. B. and Devore, I. (eds.), *Man the Hunter*. Aldine Publishing Co.
- Obayashi, T., 1991. The Ethnological Study of Japan's Ethnic Cultures: A Historical Survey. *Acta Asiatica*, 61.
- Rahmann, R., 1952. The Ritual Spring Hunt of Northeastern and Middle India. *Anthropos* 47, 871-890.
- Sakamoto, S., 1987. Origin and Dispersal of Common Millet and Foxtail Millet. *JARQ*, Vol.21.
- Sauer, C. O., 1952. *Agricultural Origins and Dispersals*. The American Geographical Society.
- , 1956. The Agency of Man on the Earth. In, Thomas, W. (ed.), *Man's Role in Changing the Face of the Earth*. The University of Chicago Press.
- Schlippe, P., 1956. *Shifting Cultivation in Africa: The Zande System of Agriculture*. Routledge & Kegan Paul.
- Shebalina, M. A. and Sazonova, L. V., 1985. *Root Crops: Brassicaceae Family - Turnip, Fodder Turnip, Swede, Radish, Agropromizdat*
- Simmonds, N. W., 1959. *Bananas*. Longmans.
- Takahashi, R., 1955. The Origin and Evolution of Cultivated Barley. *Advance in Genetics* 5.
- Werth, E., 1954. *Grasstock Hacke und Pflug: Versuch einer Entstehungsgeschichte des Landbaues*, Eugen Ulmer.
- Yen, D. E., 1972. *Origin of Oceanic Agriculture*. Archaeology and Physical Anthropology in Oceania.
- Yoshida, S., 1980. Cultivated Bananas among the Galela. In, Ishige, N. (ed.), *The Galela of Halmahera (Senri Ethnological Studies No. 7)*. National Museum of Ethnology, Osaka.

佐々木高明著作目録

- 一九五三 (論文) 「北米乾燥地域に於ける原始農耕生活——特にホピ族の場合」、『人文地理』、五卷一号、二五～四一頁。
- 一九五四 (所収) 「南アメリカ」、『世界地理民族誌』、姫岡 務・藤岡謙二郎(編)、朝倉書店、二四六～二六一頁。
- 一九五七 (論文) 「南米における焼畑農業についての二、三の考察」、『人文地理』、九卷三号、一～三三頁。
- 一九五八 (所収) 「林業村における社会生活の変容——高見村杉谷部落の場合」、『河谷の歴史地理』、藤岡謙二郎(編)、蘭書房、二四九～二六〇頁。
- 一九五九 (a) (所収) 「ラテンアメリカ(アメリカ)の集落」、『世界の集落(集落地理講座4)』、木内信藏・藤岡謙二郎・矢嶋仁吉(編)、朝倉書店、三三三～三三九三頁。
- (b) (論文) 「中部アンデスにおける村落共同体の地理的意義」、『史林』、四二卷一号、五一～七八頁。
- (c) (論文) 「北但馬山地における焼畑農業経営とその変容過程」、『地理学評論』、三三卷一〇号、一～一三頁。
- 一九六一 (論文) 「焼畑におけるイモ栽培についての覚書」、『人文』、第七集、四〇～七七頁。
- 一九六二 (a) (所収) 「西アフリカ」、『アフリカ(新世界地理9)』、織田武雄(編)、朝倉書店、一九〇～二二八頁。
- (b) (論文) 「南九州山村の焼畑農業経営上——焼畑経営隔絶山村の地理的分析・その1」、『立命館文学』、二二〇号、二四～四〇頁。
- 一九六三 (a) (所収) 「熱帯農業——焼畑と水田」、『産業地理学の諸問題(上)』、山口平四郎(編)、柳原書店、二七～四九頁。
- (b) (論文) 「南九州山村の焼畑農業経営下——焼畑経営隔絶山村の地理的分析・その1」、『立命館文学』、二二一号、四一～七〇頁。
- 一九六四 (a) (所収) 「村落社会——村落を構成する社会集団とその機能」、『離島の人文地理』、藤岡謙二郎(編)、大明堂、二二七～二五〇頁。
- (b) (論文) 「南九州の山村社会の構造とその変化——焼畑経営隔絶山村の地理的分析・その2」、『立命館文学』、

- 二二三号、五九〜八九頁。
- 一九六五 (a) (所収) 『近郊農業の衰退』(坂本英夫と共著)、『大都市近郊の変貌』、京都大学地理学教室(編)、柳原書店、三〜四九頁。
- (b) (所収) 『アメリカにおける民族地理的研究の発達——文化領域理論の発達を中心に』、『民族地理(上)』、今西錦司・姫岡 務・藤岡謙二郎・馬淵東一(編)、朝倉書店、一八〜三〇頁。
- (c) (論文) 『焼畑農業の研究とその課題』、『人文地理』、一七卷六号、六六〜九二頁。
- (d) (論文) 『焼畑農耕民の村落の形態と構造』、『人文学報』、二二号、七九〜一二八頁。
- (e) (論文) 『民族分布のエコロジー』、『海外事情』、一二卷一〇号、六二〜七〇頁。
- (f) (論文) 『パリア族の焼畑耕地とその造成技術——インド半島北部の焼畑農耕民の農業技術に関する調査報告・その1』、『民族学研究』、三〇巻一号、一五〜三七頁。
- 一九六六 (a) (所収) 『焼畑農業の研究とその課程——焼畑の地域地理学への一試論』、『文化人類学』、蒲生正雄・大林太良・村武精一(編)、角川書店、一六三〜一八九頁。
- (b) (所収) 『東南アジアの焼畑の輪栽様式と人口支持力——東南アジアの焼畑の作物構成と生産力に関する生態学的試論』、『人間——人類学的研究(今西錦司博士還暦記念論文集)』、川喜田二郎・梅棹忠夫・上山春平(編)、中央公論社、三九一〜四二二頁。
- (c) (論文) 『わが国における焼畑の地域的分布 上』、『立命館文学』、二五三号、一〜四八頁。
- (d) (論文) 『パリア族の焼畑作物とその栽培技術——インド半島北部の焼畑農耕民の農業技術に関する調査報告・その2』、『民族学研究』、三二巻二号、八三〜一〇六頁。
- (e) (論文) 『わが国における焼畑の地域的分布 下』、『立命館文学』、二五六号、三四〜七六頁。
- 一九六七 (論文) 『パリア族の精霊(ゴサイン)と焼畑農耕儀礼——インド未開焼畑農耕民のカミとその供犠についての調査報告』、『立命館文学』、二六五号、四七七〜五三四頁。
- 一九六八 (a) (单著) 『インド高原の未開人——パリア族調査の記録』、古今書院、二四〇頁。
- (b) (論文) 『わが国の焼畑作物とその輪作形態 上』、『立命館文学』、二七四号、一二〜四四頁。

- (c) (論文) 「わが国の焼畑作物とその輪作形態 下」、『立命館文学』、二七五号、四一〜七〇頁。
- (d) (論文) 「わが国の焼畑経営方式の地域的類型 上」、『史林』、五一卷四号、九一〜一三八頁。
- (e) (論文) 「わが国の焼畑経営方式の特色——とくにその経営技術の分析を中心として」、『立命館文学』、二七八号、一〜四〇頁。
- 一九七〇
- (f) (論文) 「わが国の焼畑経営方式の地域的類型 下」、『史林』、五一卷五号、七八〜一二九頁。
- (a) (单著) 『熱帯の焼畑——その文化地理学的比較研究』、古今書院、四一二頁。
- (b) (論文) 「シコクビエと早乙女——田植の起源についての一仮説」、『季刊人類学』、一卷一号、四二〜七三頁。
- (c) (論文) 「バタン島のヤム芋栽培・その技術と儀礼——立命館大学バタン諸島学術調査報告の中から」、『立命館文学』、三〇五号、四四〜七〇頁。
- 一九七一
- (d) (論文) 「中部ネパールの民家と生活」、『都市住宅』、三一号、七四〜七七頁。
- (a) (单著) 『稲作以前(NHKブックス147)』、日本放送出版協会、三一六頁。
- (b) (編著) 『バタン島の自然と文化——その調査の記録』、立命館大学探検部フィリピン・バタン諸島学術調査隊、立命館大学探検部、二四五頁。
- (c) (共著) 『日本人のこころ——文化未来学への試み』、梅植忠夫・加藤秀俊・小松左京・米山俊直(共著)、朝日新聞社、二二七頁。
- (d) (所収) 『日本の基層文化』、『日本総論(日本の文化地理18)』、木内信蔵(編)、講談社、七二〜八七頁。
- (e) (所収) 「対馬の焼畑——わが国のムギ作型焼畑の特色とその系統についての覚書」、『織田武雄先生退官記念人文地理学論叢』、織田武雄先生退官記念事業会(編)、柳原書店、二二五〜三三八頁。
- (f) (所収) 「中部ネパールの民家と生活」、『住まいの原型I』、泉 靖一(編)、鹿島出版会、二七七〜二八九頁。
- (g) (論文) 「バタン島の民家と生活——その歴史の変遷をめぐって」、『都市住宅』、四〇号、七一〜七六頁。
- 一九七二
- (a) (单著) 『日本の焼畑——その地域的比較研究』、古今書院、四五七頁。
- (b) (論文) 「文化地理学と境界領域研究——一つの素描的考察」、『地理』、一七卷一号、六三〜七〇頁。
- (c) (論文) Socio-Economic Structure and the Custom of Stubble Grazing in Farm Village in Central Nepal. In, R. L.

Singh (ed.), *Rural Settlements in Monsoon Asia: Proceedings of IGU Symposia*. Varanasi and Tokyo, The National Geographical Society of India, pp.129-140.

- (d) 論文 「文化としての食物と食事——人間にとつての食事とは何か」、「アジア文化」、九卷一号、五二〜六〇頁。
- (e) (論文) 「日本人による戦後の東南アジア・南アジアの探検と調査」(松原正毅と共著)、『探検と冒険(朝日講座 2)』、朝日新聞社、二三六〜二六八頁。
- 一九七三 (a) (共編) 『目でみる人類学』、京都大学人類学研究会(編・代表)、ナカニシヤ出版、一六〇+十三頁。
- (b) (共編) 『南島の古代文化』、国分直一(共編)、毎日新聞社、二〇七頁。
- (c) (共著) 『バタン島の民家と生活——その歴史の変遷をめぐって』、『住まいの原型Ⅱ』、吉阪隆正ほか(共著)、鹿島出版会、一二四〜一四一頁。
- (d) (所収) 『木の実の食事文化』、『世界の食事文化』、石毛直道(編)、ドメス出版、六〇〜八一頁。
- (e) (論文) 『沖繩本島における伝統的焼畑農耕技術——その特色原型の探求』、『人類科学』、二五号、七九〜一〇七頁。
- (f) (論文) 『モチとイモと照葉樹林文化と』、『総合講座 日本社会文化史』、月報1、講談社、三〜六頁。
- 一九七四 (a) (共著) 『学研の図鑑・日本の地理Ⅰ 自然とくらし』、鈴木泰二・浮田典良(共著)、学習研究社、一六〇頁。
- (b) (共著) 『風と流れと——暮らしの中世と現代』、林屋辰三郎ほか(編)、朝日新聞社、三二〇頁。
- (c) (論文) 『世界を描く——地図・空間描写の実像と虚像(グラフィック・コミュニケーションの系譜(3))』、『グラフィケーション(富士ゼロックス)』、九三号、一二一〜一二五頁。
- 一九七五 (a) (論文) 『稲作以前——日本農耕文化の原点を探る』、『続・日本古代史の謎』、上田正昭ほか(共著)、朝日新聞社、七〜四八頁。
- (b) (所収) 『二つのバタン島漂流記——鎖国下における通航の記録とその民族誌的意義』、『地域と交通』、山口平四郎先生定年記念事業会(編)、大明堂、三〇五〜三三五頁。
- 一九七六 (a) (共著) 『続・照葉樹林文化——東アジア文化の源流』、上山春平・中尾佐助(共著)、中央公論社(中公新書 4388)、一三三八頁。

- (b) (共著) 『古代史への視点(朝日ゼミナール)』、上田正昭・樋口隆康・上山春平・直木孝次郎(共著)、朝日新聞社、三三九頁。
- (c) (編著) 『インド・ヒマラヤ(民族探検の旅3)』、梅棹忠夫(監修)(編著)、学習研究社、一五五頁。
- (d) (所収) 『南島における畑作農耕技術の伝統——その特色と原型の探求』、『沖繩——自然・文化・社会』、九学会連合沖繩調査委員会(編)、弘文堂、二五〇頁。
- (e) (所収) 『東部山間の村々』(森島充子と共著)、『近世の歴史と景観(宇治市史3)』、林屋辰三郎・藤岡謙二郎(編)、宇治市役所、一七三〜三九三頁。
- (f) (論文) 『ルカイ族の焼畑農業——その技術と儀礼についての調査報告』(深野康久と共著)、『国立民族学博物館研究報告』、一卷一号、三三〜一二五頁。
- 一九七八 (a) (編著) 『ベルリン世界民族博物館(世界の博物館12)』、講談社、一七八頁。
- (b) (所収) 『モラウニの慣行とその背景——中部ネパールの水田村における農業経営と刈跡放牧慣行・その事例研究』、『探検・地理・民族誌(今西錦司博士古稀記念論文集3)』、加藤泰安・中尾佐助・梅棹忠夫(編)、中央公論社、三五〜四〇八頁。
- (c) (所収) 『『李朝実録』所載の漂流記にみる沖繩の農耕技術と食事文化』、『歴史地理研究と都市研究(上)』、藤岡謙二郎先生退官記念事業会(編)、大明堂、四一四〜四二三頁。
- (d) (所収) 『地図と歴史と環境認識の変遷』、『環境と文化——人類学的考察』、石毛直道(編)、日本放送出版協会、二三八〜二七六頁。
- (e) (論文) 『新粟のチマキと豊猟の占い——ルカイ族・パイワン族のアワ祭り抄』、『国立民族学博物館研究報告』、三卷二号、一九〜一五八頁。
- 一九七九 (a) (所収) 『尾口村の第一次産業 焼畑・出作りと焼畑経営の技術』、『石川県尾口村史(資料編・第二卷)』、尾口村史編纂専門委員会(編)、一五三〜二〇一頁。
- (b) (論文) 『ハルマヘラ島北部、ガレラ族の焼畑耕地とその土地利用』、『季刊人類学』、一〇卷四号、三〜四四頁。
- 一九八〇 (a) (編著) 『東南アジアカラー百科目でみる世界の国164』、TBSブリタニカ、一九〇頁。

- (b) (所収) 「アマボシ考——白山麓のヒエ穂の火力乾燥法」、『日本民俗風土論』、千葉徳爾(編)、弘文堂、三五五～三九〇頁。
- (c) (所収) 「ハルマヘラ島北部、ガレラ族の焼畑作物——作物構成の特色とその歴史的性格」、『日本民族文化とその周辺 歴史・民族編』、国分直一博士古稀記念論集編纂委員会(編)、新日本図書、七二六～七五六頁。
- (d) (所収) Agriculture. In Ishige, N. (ed.), *The Galela of Halmahera: A Preliminary Survey* (Senri Ethnological Studies No. 7), pp. 141-180.
- 一九八一 (a) (共著) 『新・日本語考——ルーツと周辺』、大野 晋・森 浩一・江上波夫・吉田敦彦(共著)、朝日新聞社、二二八頁。
- (b) (所収) 「茶と照葉樹林文化——東南アジア北部山地における茶の原初的利用形態の探求」、『茶の文化——その総合的研究(第2部)』、梅棹忠夫(監修)、守屋 毅(編)、淡交社、三〇三～三二二頁。
- (c) (所収) 「空間認識の原像——民族地理的序説」、『地表空間の組織』、立命館大学地理学同校友会(編)、古今書院、一四～二二頁。
- (d) (所収) 「第一次産業の展開」(宇野文男と共著)、『石川県尾口村史第三卷・通史編』、尾口村史編纂専門委員会(編)、四五五～四七九頁。
- (e) (所収) 「白山麓の作り——その盛衰と実態」、同前、六二七～六七三頁。
- (f) (所収) 「手取川ダムと尾口村」(矢ヶ崎孝雄と共著)、同前、八四〇～九三一頁。
- (g) (論文) 「東南アジアにおける農耕形態の展開」、『熱帯農業』、二五卷三号、二二九～二三五頁。
- (h) (論文) 「マイクロ・アークオロジーへの期待」、『季刊人類学』、一二卷四号、一三二～一三四頁。
- (i) (紀行) 「雲南紀行 日本民族の深層に影おとす照葉樹林文化のふるさとを行く」、『週刊朝日』、二月一五日増刊、朝日新聞社、二二～二七頁。
- 一九八二 (a) (単著) 『照葉樹林文化の道——ブータン・雲南から日本へ(NHKブックス422)』、日本放送出版協会、三三五頁。
- (b) (所収) 「民族学と考古地理学」、『総論と研究法(講座考古地理学1)』、藤岡謙二郎(編)、学生社、九一～一〇一

- 頁。
- (c) (論文) 『茶の文化史——食べる茶から飲む茶へ』、『郵政』、三四卷三号、二〇〇—二二三頁。
- (d) (論文) 『照葉樹林帯の住いと器——ハンギング・ウォールと漆器のことなど』、『民博通信』、一六号、三九—四六頁。
- (e) (論文) 『東南アジアにおける農耕形態の展開』、『熱帯農業』、二五卷五号、一二九—一三五頁。
- 一九八三 (a) (編著) 『日本農耕文化の源流——日本文化の原像を求めて』、日本放送出版協会、五〇六頁。
- (b) (所収) 『稲作以前の生業と生活』、『稲と鉄——さまざまな王権の基盤(日本民俗文化大系3)』、森 浩一ほか(編)、小学館、五七—一三〇頁。
- (c) (編集) 『週刊朝日百科 世界の食べ物128 果物とナッツの文化』、朝日新聞社、一九七—二二四頁。
- (d) (所収) 『青木文教師とそのチベット将来資料』、『国立民族学博物館蔵青木文教師将来チベット民族資料目録(国立民族学博物館研究報告別冊1)』、長野泰彦(編)、国立民族学博物館、一七三—一八三頁。
- (e) (論文) 『バタン島のシイラ漁業とその社会的意味』、『えとのす』、一一号、本文一三八—一四二+写真一二二—一二五頁。
- 一九八四 (a) (編著) 『雲南の照葉樹のもとで——国立民族学博物館中国西南部少数民族民族文化学術調査団報告』、日本放送出版協会、三三三頁。
- (b) (所収) 『日本海諸地域の基層文化』、『古代の日本海諸地域——その文化と交流』、森 浩一(編)、小学館、四九—六六頁。
- (c) (所収) 『南島の伝統的稲作農耕技術』、『南島の稲作文化——与那国島を中心に』、渡部忠世・生田 滋(編)、法政大学出版局、二九—六六頁。
- (d) (所収) 『世界の伝統的主作物とその利用』、『栄養生態学——世界の食と栄養』、小石秀夫・鈴木継美(編)、恒和出版、一五—六三頁。
- 一九八五 (a) (共編) 『生と死の人類学』、石川栄吉・岩田慶治(共編)、講談社、三七—一頁。
- (b) (共著) 『古代学への招待1』、岸 俊男・樋口隆康(共著)、大阪書籍、二二—五頁。

- (c) (所収) 「イネと日本人——稲作文化と非稲作文化の間」、『登呂遺跡と弥生文化——いま問い直す倭人の社会』、大塚初義・森 浩一(編)、小学館、三五〜六四頁。
- (d) (論文) 「日本文化の東・西——日本文化起源論へのアプローチ」、『立命館文学』、四八三号・四八四号、九八〜一二八頁。
- 一九八六 (a) (单著) 『縄文文化と日本人——日本基層文化の形成と継承』、小学館、二六七頁。
- (b) (所収) 『東アジア農耕文化の類型と展開』、『日本人の起源——周辺民族との関係をめぐって』、埴原和郎(編)、集英社、八五〜一〇五頁。
- (c) (所収) 『倭人と南からきた文化——焼畑農耕文化と水田農耕文化』、『日本人誕生(日本古代史1)』、埴原和郎(編)、集英社、八九〜一二六頁。
- 一九八七 (a) (共編) 『週刊朝日百科 日本の歴史39 稲と金属器』、佐原 眞(共編)、朝日新聞社、一九二頁。
- (b) (共編) 『文化人類学事典』、石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・祖父江孝男(共編)、弘文堂、九三五頁。
- (c) (所収) 『稲作文化の伝来と展開——照葉樹林文化と日本の稲作』、『アジアの中の日本稲作文化——受容と成熟(稲のアジア史3)』、渡部忠世(編)、小学館、三九〜九六頁。
- 一九八八 (a) (共著) 『畑作文化の誕生——縄文農耕論へのアプローチ』、松山利夫(共著)、日本放送出版協会、三八六頁。
- (b) (論文) 『東南アジアの焼畑における陸稲化現象——その実態と類型』、『国立民族学博物館研究報告』、一二卷三号、五五六〜六一二頁。
- (c) (論文) 『稲作文化の伝来と展開』、『季刊自然と文化』、二〇号、一〇〜一九頁。
- (d) (論文) 『山民の生業と生活・その生態学的素描——白山麓と秋山郷(共同研究「畑作農民の民俗誌的研究」)』、『国立歴史民俗博物館研究報告』、一八集、三〜三三頁。
- 一九八九 (a) (单著) 『東・南アジア農耕論——焼畑と稲作』、弘文堂、五一七頁。
- (b) (共編) 『文化地理学』、大島襄・浮田典良(共編)、古今書院、四〇三頁。
- (c) (論文) 『はるかなり、ライスロード』、『ネクステージ』、三号、五二〜五九頁。
- 一九九〇 (a) (共著) 『シンポジウム 弥生文化と日本語』、大野 晋・小沢重雄・大林太良・佐原 眞(共著)、角川書店、

二〇六頁。

- (b) (論文) 『国立民族学博物館の創設と経営——その思想と実践』、『民族学と博物館(梅棹忠夫著作集第15巻)』、中央公論社、五九五～六一四頁。
- (c) (共著) 「稲作文化の起源と展開」、『シンポジウム 弥生文化と日本語』、佐原 真・大林太良・大野 晋・小沢重男、角川書店、六八～八七頁。
- (d) (所収) 「東南アジア・オセアニアの生業形態と物質文化の分布——「生態環境と文化複合」という課題に沿って」、『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析(国立民族学博物館研究報告別冊11)』、大林太良・杉田繁治・秋道智彌(編)、二三七～二七二頁。
- (e) (所収) 「中国西南少数民族文化与日本的基層文化」、『西南中国諸民族文化の研究——日中合同研究集会報告』、中国西南民族研究学会・国立民族学博物館(編)、一～八頁。
- 一九九一
- (a) (共編) 『日本文化の源流——北からの道・南からの道』、大林太良(共編)、小学館、四五二頁。
- (b) (単著) 『日本誕生(日本の歴史1)』、集英社、三三六頁。
- (c) (所収) 「稲作文化の成立と展開——弥生文化のアジアでの位置づけ」、『弥生文化——日本の源流をさぐる』、大阪府弥生文化博物館(編)、平凡社、七三～八一頁。
- (d) (所収) 「從稲作看苗瑤文化」、『西南民族研究』、中国西南民族研究学会(編)、貴州民族出版社、三二六～三三二頁。
- (e) (論文) The Wa People and their Culture in Ancient Japan: The Cultures of Swidden Cultivation and Padi-Rice Cultivation, *Acta Asiatica, Bulletin of the Institute of Eastern Culture* 61: 24-46.
- 一九九二
- (f) (論文) 「民具の比較民族学——東南アジア・オセアニアを中心に」、『歴史と民俗』、八号、七～三一頁。
- (a) (共著) 『照葉樹林文化と日本』、中尾佐助(共著)、くもん出版、二四一頁。
- (b) (所収) 「ナラ林文化の展開——北からの文化の道」、『謎の王国・渤海』、中西 進・安田喜憲(編)、角川書店、三三一～六一頁。
- (c) (論文) 「黒潮の道——南島の島々を北上した文化」、『季刊大林』、三五号、三四～四一頁。

- (d) (論文) 「農耕文化の異なる論理——二つの事例から」、『農耕の技術と文化』、一五号、二五～四一頁。
- 一九九三 (a) (編著) 『民族学の先駆者——鳥居龍蔵の見たアジア』、国立民族学博物館、一六六頁。
- (b) (編著) 『農耕の技術と文化』、集英社、六九三頁。
- (c) (単著) 『日本文化の基層を探る——ナラ林文化と照葉樹林文化(NHKブックス667)』、日本放送出版協会、二五三頁。
- (d) (共編) 『日本文化の起源——民族学と遺伝学の対話』、森島啓子(共編)、講談社、三〇五頁。
- (e) (所収) 『民族学と考古学からみた日本人』、『モンゴロイド地球を動く』、第6回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会(編)、九二～一〇四頁。
- (f) (所収) 「ナラ林文化考——東北アジアの基層文化の文化生態学」、『日本人と日本文化の形成』、埴原和郎(編)、朝倉書店、二〇七～二三〇頁。
- (g) (所収) 「畑作文化と稲作文化」、『日本列島と人類社会(岩波講座日本通史1)』、網野善彦・朝尾直弘(編)、岩波書店、二二三～二六三頁。
- 一九九四 (a) (共編) 『縮刷版 文化人類学事典』、石川栄吉・梅棹忠夫・大林太良・蒲生正男・祖父江孝男(共編)、弘文堂、九三五頁。
- (b) (所収) 「北からの文化——ナラ林文化とその特色」、『風土が証すもの(日本人のルーツを探る——歴史探求講座3)』、大林太良(監修)、日本通信教育連盟生涯学習局、三～一三頁。
- (c) (論文) 「照葉樹林帯の食事文化」、『調理科学』、二七卷三号、三五～四一頁。
- (d) (論文) 「根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見——中尾佐助博士の農耕文化の大類型区分をめぐって」、『農耕の技術と文化』、一七号、一〇四～一三三頁。
- 一九九五 (a) (所収) 「農耕文化の異なる論理——熱帯林の破壊とコメ問題」、『農耕空間の多様性と選択——農耕の世界、その技術と文化I』、渡部忠世(監修)、大明堂、一一～二八頁。
- (b) (論文) 「多文明の時代のアジア——西欧と非西欧の対立の中から」、『季刊あうろーら』、創刊号、一二二～一四九頁。

- 一九九六 (a) (所収) 「国立民族学博物館の特色と活動」、『日本民族学の現在——1980年代から90年代へ』、ヨーゼフ・クライナー(編)、新曜社、一六〇～二六頁。
- (b) (所収) 「東アジアにおける二つのナラ林帯——その文化史的意義を考える」、『ヒト・モノ・コトバの人類学(国分直一博士米寿記念論文集)』、劉茂源(編)、慶友社、三二七～三三〇頁。
- (c) (所収) 「苗族の稲作とモチとナレズシ——台江県梅影村における調査を中心に」、『中国貴州省苗族の民俗文化——日本と中国との農耕文化の比較研究』、福田アジオ(編)、文部省科学研究費補助金研究成果報告書、三三三～五一頁。
- 一九九七 (a) (単著) 『日本文化の多重構造——アジア的視野から日本文化を再考する』、小学館、三三四頁。
- (b) (共著) 「アイヌ文化を考える視点——歴史的展望にたつて」、『アイヌ語が国会に響く(菅野茂・アイヌ文化講座)』、菅野 茂ほか共著、草風館、二〇～三五頁。
- (c) (論文) 「焼畑の恵みとその限界——森林で営まれる農耕の実態」、『森林文化研究』、一八巻、一九～三六頁。
- 一九九八 (a) (単著) 『地域と農耕と文化——その空間像の探求』、大明堂、三四八頁。
- (b) (翻訳) 『照叶樹林文化之路——自不丹・云南至日本』、云南大学出版社、一八五頁。
- (c) (論文) 「雲南省劍川県海門口遺跡出土の炭化穀粒をめぐる——それはヒエではなく、アワであった」(松谷暁子・李昆声・阪本寧男と共著)、『国立民族学博物館研究報告』、二二巻四号、八〇三～八二七頁。
- (d) (論文) 「アイヌ民族の歴史と文化——その特色と文化振興への道」、『月刊文化財』、四一五号、四～一〇頁。
- (e) (訳著) 『照葉樹林文化之路——自不丹・雲南至日本』、雲南大学出版社、一八五頁。
- 一九九九 (a) (単著) 『照葉樹林帯の食文化——日本文化のルーツを探る(作陽ブックレット10)』、れんが書房新社、六三頁。
- (b) (所収) 『照葉樹林文化と日本の緑茶文化』、『緑茶文化と日本人』、熊倉功夫・杉山公男・棒村純一(編)、ぎょうせい、一四～二二頁。
- (c) (論文) 「多文化・多文明の世紀・日本文化の可能性を考える」、『NIRA政策研究——NIRA設立25周年記念特集』、一二巻三号、五～八頁。
- (d) (論文) 「アイヌ新法の誕生とその意義を考える」、『学士会会報』、八二三号、六五～七一頁。

- 二〇〇〇 (a) (单著) 『多文化の時代を生きる——日本文化の可能性』、小学館、二三八頁。
- (b) (論文) 『日本の稲作農耕のはじまり』、『公庫月報(農林漁業金融公庫)』。
- (c) (所収) 『雲南・シブソーンパンナを行く——鶏のふるさとで』、『鶏と人——民族生物学の視点から』、秋篠宮文仁(編)、小学館、二五三頁。
- 二〇〇一 (a) (单著) 『縄文文化と日本人——日本基層文化の形成と継承(講談社学術文庫1491)』、講談社、三二五頁。
- (d) (所収) 『根栽農耕文化と雑穀農耕文化の発見——照葉樹林文化論を生み出した「農耕起源論」の枠組み』、『照葉樹林文化論の現代的展開』、金子 務・山口裕文(編)、北海道大学図書刊行会、四三七〜四六九頁。
- 二〇〇二 (a) (論文) Studies of Vegeture in Japan: Their Origin and Development. In, S. Yoshida, and P. J. Matthews (eds), *Vegeture in Eastern Asia and Oceania (J CAS Symposium Series, National Museum of Ethnology 16)*, pp. 1-15.
- (b) (所収) 『ヒエの加熱処理法とその用具』、『もの・モノ・物の世界——新たな日本文化論』、印南敏秀・神野善治・佐野賢治・中村ひろ子(編)、雄山閣、二九四〜三二七頁。
- (c) (論文) 『多文化時代の到来と日本文化の役割』、『日本食品工業倶楽部「フードロビー30周年記念号』』、四二〜四六頁。
- 二〇〇三 (a) (单著) 『南からの日本文化(上)——新・海上の道(NHKブックス980)』、日本放送出版協会、二八二頁。
- (b) (单著) 『南からの日本文化(下)——南島農耕の探求(NHKブックス981)』、日本放送出版協会、三一一頁。
- (c) (共編) 『稲作のはじまり』、『週刊朝日百科 日本の歴史37 稲と金属器(新訂増補)』、佐原 真(共編)、朝日新聞社、一九六〜二〇二頁。
- (d) (所収) 『根栽農耕文化論の成立と展開——オセアニア・東南アジアの文化史復元に関する若干の問題』、『イモとヒト——人類の生存を支えた根栽農耕』、吉田集而・堀田満・印東道子(編)、平凡社、二六九〜二八八頁。
- 二〇〇五 (a) (論文) 『稲作以前』再考——稲作文化と非稲作文化の追及』、『季刊東北学』、二号、三九〜五二頁。
- (b) (論文) 『地域の時代と伝統文化——伝統文化の再生とその意義を問う』、『地域政策研究』、三〇号、七〜一〇頁。
- (c) (論文) 『焼畑農耕民の山の神——山の神信仰とその展開』、『社叢学研究』、二号、二〜二〇頁。

- 二〇〇六 (a) (単著) 『山の神と日本人——山の神信仰から探る日本の基層文化』、洋泉社、二五二頁。
 (b) (所収) 『照葉樹林文化論——中尾佐助の未完の大仮説』、『照葉樹林文化論(中尾佐助著作集第6巻)』、金子務ほか(編)、北海道大学出版会、七六三〜七九一頁。
- 二〇〇七 (c) (所収) 『新説・山の神考』、『山岳信仰と日本人』、安田喜憲(編)、NTT出版、三二七〜三五七頁。
 (単著) 『照葉樹林文化とは何か——東アジアの森が生み出した文明(中公新書1921)』、中央公論社、三二二頁。
- 二〇〇八 (論文) The Origins of Japanese Ethnic Culture: Looking Back and Forward. In H. D. Otschlegler (ed.), *Theories and Methods in Japanese Studies: Current State and Future Developments: Papers in Honor of Josef Kreiner*. V&R unipress.
- 二〇〇九 (a) (単著) 『日本文化の多様性——稲作以前を再考する』、小学館、二五五頁。
 (b) (単著) *La estructura multiple de la Cultura Japonesa: Reperisado la cultura japonesa desde una perspectiva asiatica*. El Colegio de Mexico Traducion: Virginia Meza.
 (c) (論文) 『戦後の日本民族文化起源論——その回顧と展望』、『国立民族学博物館研究報告』、三四卷二号、二二一〜二二八頁。
- 二〇一一 (a) (単著) 『改訂新版 稲作以前——教科書がふれなかった日本農耕文化の起源(歴史新書24)』、洋泉社、三八〇頁。
 (b) (所収) 『民博をつくる——その思想と実践』、『梅棹忠夫——知的先覚者の軌跡』、特別展「ウメサオタダ才展」実行委員会(編)、千里文化財団、八四〜九三頁。
- 二〇一二 (所収) 『後狩詞記』の背景をめぐる比較民族学——モンズーン・アジアの焼畑農耕民社会における狩猟』、『日本民族の源流を探る——柳田國男『後狩詞記』再考』、クライナー・ヨーゼフ(編)、三弥井書店、八六〜一〇九頁。

初出一覧

*本書各章は以下に掲げる論文を元に再編したものである。本書に掲載するにあたり、各章に解説・補説・補論を加え、内容にも加筆・改変を加えた。

第一章 『稲作以前』からの出発——研究の原点をふり返る

〔書き下ろし〕

第二章 戦後の日本民族文化起源論——その回顧と展望

〔国立民族学博物館研究報告〕、三四卷二号、二二一～二二八頁、二〇〇九〕

第三章 日本農耕文化の源流をさぐる

第一節〔『日本農耕文化の源流——日本文化の原像を求めて』、日本放送出版協会、二～一五頁、一九八三〕

第二節〔『畑作文化の誕生——縄文農耕論へのアプローチ』、松山利夫（共編）、日本放送出版協会、一～二二頁、

一九八八〕

第四章 東アジアの基層文化と日本

〔『日本文化の源流——北からの道・南からの道』、大林太良（共編）、小学館、一～八二頁、一九九二〕

第五章 畑作文化と稲作文化——日本農耕文化の基層を作るもの

〔『日本列島と人類社会（岩波講座日本通史第1巻）』、岩波書店、二二三～二六三頁、一九九三〕

第六章 稲作の始まり

〔週刊朝日百科37 新訂増補日本の歴史・原始・古代7・稲と金属器』、朝日新聞社、一九六～二〇二頁、二〇〇三〕

第七章 照葉樹林帯にその文化の特色を探る

第一節・第二節〔『照葉樹林帯の食文化（作陽ブックレット10）』、作陽学園出版部、一九九九〕

第三節〔週刊朝日〕、一九八一年二月一五日増刊、朝日新聞社、二二〇～二七頁、一九八二〕

第八章 初期の照葉樹林文化論——一九七〇年代の論説

第一節・第二節〔「照葉樹林文化と稲作の系譜」『古代史への視点(朝日ゼミナール)』、上田正昭ほか(共著)、朝日新聞社、六八～一三三頁、一九七六〕

第三節〔「モチ文化の發見」『総合講座 日本の社会文化史』、月報1、講談社、三～六頁、一九七三〕

第九章 ナラ林文化をめぐって

第一節〔『月刊みんぱく』、八巻九号、一五～一七頁、一九八四〕

第二節〔『日本人と日本文化の形成』、埴原和郎(編)、朝倉書店、二〇七～二三〇頁、一九九三〕

第三節〔『ヒト・モノ・コトバの人類学(国分直一博士米寿記念論文集)』、慶友社、三二七～三三〇頁、一九九六〕

第十章 根菜農耕文化論の成立と展開——オセアニア・東南アジアの文化史復元への寄与

〔『イモとヒト——人類の生存と支えた根菜農耕』、吉田集而ほか(編)、平凡社、二六九～二八八頁、二〇〇三〕

第十一章 モンスーンアジアの焼畑農耕社会における狩獵——『後狩詞記』の背景をめぐる比較民族学

〔『日本民族の源流を探る』、クライナー・ヨーゼフ(編)、三弥井書店、八六～一〇九頁、二〇一三〕

第十二章 ヒエ栽培についての二つの覚書

第一節〔『石川県尾口村史(第二卷・資料編)』、尾口村、一五三～二〇一頁、一九七九〕

第二節〔『もの・モノ・物の世界』、印南敏秀ほか(編)、雄山閣、二九四～三一七頁、二〇〇二〕

第十三章 山民の生業と生活・その生態学的素描——白山麓と秋山郷

〔『地域と農耕と文化——その空間像の探究』、大明堂、二七一～三二〇頁、一九九八〕

あとがき

本書は佐々木高明先生ご自身により、多くの著者・論文の中から選ばれた一三編からなる論文集である。学術論文から啓蒙的な随筆まで幅広く多くの著作を残されており、ひと昔前ならば著作集が刊行されたのであろうが、現在ではそれが難しくなり、各論文にご本人による解説をつけて一冊に納める形になった。国立民族学博物館の館長を退かれた後も、幾つかの組織の世話をされて忙しい日々を送ってこられたが、それらの仕事から次第に解放されていかれたなかで、ぜひとも残したい論文にしばって本書の構成を考えられたのではないかと推測している。そのために内容的には重複がみられる。

先生の研究は外国文献サーベイと国内の焼畑研究から始まり、海外調査が困難な一九六〇年代初めに、川喜田二郎氏(当時東京工業大学のネパール・インドのフィールド調査にお声がかかり、大きな成果を上げられた。私の大学院の時に人文地理学会例会で沢山のスライドを使ったパリア族の調査報告が行われたのを記憶している。

その頃から、京大人文科学研究所分館で行われていた今西錦司氏の研究会に加わり、中尾佐助氏と出合い、照葉樹林文化論を取り入れて、民族学に傾斜していかれた。その仕事が評価されて、梅棹忠夫氏が主導した国立民族学博物館設立の中核として参画することになった。同時期には京都大学教養学部文化人類学教室が新設されることになり、アメリカ留学された農業経済学出身の米山俊直氏との調整が行われたという。海外(国際)学術研究調査の枠が拡大するとともに、民博から多くの調査隊を派遣する中心となり、フィールド・ワークを続けてこられた。とくに、一九八〇年、最初の中国訪問団に加わり、同国への学術調査への扉を開けるといふ大きな功績

を残されている。結果として、大学にあつては不可能な、頻繁に長期にわたる海外調査ができるという恵まれた研究環境を構築されて、素晴らしい成果をあげてこられた。

主軸となる研究テーマは、焼畑が一九五七年、照葉樹林文化が一九七八年、日本の基層文化が一九九四年から移行している。著書としてはそれぞれ四、八、十四編となる。一九七一年に出版された『稲作以前』（三冊目の著書、三〇版を重ねたという）によって当時のご本人の言葉で「異端の学説」を発表して以来、次々に論を展開されてこられたが、最後に出版された著作が洋泉社の歴史新書として復刻された『改定新版稲作以前——教科書がふれなかつた日本の農耕文化の起源』（二〇一一年二月、佐藤洋一郎氏の解説がある）であることに、五〇年以上にわたる活発な研究活動と研究者としての名誉が集約されていると思う。高度経済成長の中で消えゆく焼畑を研究することから始められて、海外での多くのフィールド・ワークをこなされる中から日本文化の源流の追求につながることは、当時ご本人でも、また学界においても想像できない世界であつた。その研究が市民権を得るに至ったことに畏敬の念を覚える。また、先生の強みの一つには考古学に詳しいことである。苦学されていた時期に、京大文学部の旧陳列館に入入りされていたことが生かされているのではないかと想っている。最近、別のジャンルの書物には考古学者として紹介されていたのである。長年の研究に対しては多くの評価を受けてこられたが、二〇〇四年の南方熊楠賞の受賞を最も喜んでおられたことを記しておきたい。

本書に収められた論文の各章のまえがき・解説はこの本のために新たに書きおろされた。すべてに日付が記されていないが、最も古い記載が二〇〇八年であり、二〇〇七年十一月に『照葉樹林とは何か』（中公新書）が出版された後に準備を始めたのではないかと推測している。最終の十三章は『国立歴史民俗博物館研究報告』（一九八八）所収の論文であるが、図表も含めて徹底的に加筆修正されていた。その作業を終えられた解説には二〇一一年十一月十七日、八二歳の誕生日と記されていたし、最終の原稿は十一章補論の十二年四月二十日である。

現役時代に多くの著書が出版(共著を含めて五十一冊)されたが、その担当者が皆退職してしまつて出版社とのつながりがないという話を話された。そこで小生のか細い関係の中から、関西の出版社が連絡を取りやすいと思ひ、海青社の宮内さんにお話して、引き受けて下さることになった。初めて三人で打ち合わせをした折、偶然にもかつてナカニシヤ書店から出版した文化人類学の教科書の際の担当者であつたことが分かつた。また、第三部、日本の山村文化の校正は、先生の卒業生の一人であり、民博でも一緒に仕事をされていた松山利夫さんに依頼するように、との先生のご指示もあり、手伝つてくださり正確を期すことができた。

さて、最後に専門分野(都市地理学・商業地理学)の異なる私がなぜ本書の出版に係つたかの経緯を記しておくのが良いであろう。京都大学文学部地理学科に進学した一九六二年春に先生は教養部地理学科(主任 藤岡謙二郎先生)の助手から母校の立命館大学に赴任された。十年という年齢差は微妙に素敵な距離感であると思うのだが、ある夜、後任助手の小林健太郎さん(故人)に誘われて洛西、太秦(太子道)のお宅に伺つた。その時の話の内容はもちろん記憶にないが、アットホームな楽しく、有益な時を過ごした。それをきっかけに、厚かましくも、たびたび一人で夜遅く伺うことになつていった。奥様はじめ小さかつたお子様方にも大変迷惑をおかけしたことになる。今思えば、後に民博に赴任した一年後輩の端信行君(ともに探検部に所属)と前年五月の連休に岐阜県徳山村の出作り地帯を歩いてきたことが、先生との距離を近くしたのかもしれないと思う。それから大学院時代にかけて、論文やリポートで行き詰まつた時に気楽に話をして、適切かつ厳しいアドバイスも受けたし、小生の初めての外国行き(ペルー等)に際しても見どころを示唆して下さいました。そのアドバイスを実行できていたら、またその後展開されてきた都市人類学という分野に気付けば文化人類学に向かつたかもしれないと思うが、当時は求められたハードルの高さからそれを断念した。他方、資料や写真の整理方法などその後の研究者として必要な技能を教えていただいたことは有難いことであつたと思つている。

私の最初（一九六〇年代末）の就任地は改組されて間もない埼玉大学教養学部地理学科であった。隣の研究室が文化人類学教室（川田順造さんが抜けた直後、友枝啓泰さん一人）であり、授業の手伝いもしていた。そのため、先生に集中講義をお願いし（石川先生にも非常勤講師に来ていただいた）、快く引き受けて下さった。そこからは文化人類学の研究者が多く育っていった。現民博館長の須藤さんはその第一期生にあたる。

実は先生が民族学博物館に移られてご多忙になられてからは、ほとんどお会いしていなかった。復活したのは二〇〇四年からである。それは文化地理学を専門とする後輩の久武哲也君とその二月に地人書房の石原さんを偲ぶ会の席で、戦後初期の京大地理学教室の大学院出身者、岩田慶治、石川栄吉、佐々木高明氏らが民族学に移ったことを地理思想史の立場から調べたいが、面識がないとのことであった。それなら手伝えるよといって、その夏、東京で最初に石川先生から、他の何人かとともに半日話を伺ったが、翌年春に亡くなられた。その夏に佐々木先生のお宅で二人で聞き取りを始めたが一回では終わらなかった。しかし、その秋に彼は病に倒れて翌年に亡くなり、その続きは出来なくなった。結果として先生のお仕事関係の膨大なデータが小生の手元に残り、それ以降たびたび先生とお会いするようになった。

いつ先生が論文集を出版したいといわれたのかは記憶にない。先生との出会いにより、なんとか研究者として歩めたことと、これまでに大変お世話になったことに対する感謝の気持ちで、著作集の出版をお手伝いできることの喜びを感じつつ作業を進めてきた。お元気であつたらこの内容をもとに、会話がはずんだらうにとの心残りがある。出版社側の事情から校正に手間取り時間が流れた。

結局、十二年十一月にお会いしたのが最後になってしまい、本書をお元気なうちに刊行出来なかったことは、慙愧の念に堪えない。

二〇一三年八月

寺阪 昭信

佐々木高明 (SASAKI, Komei)

■ 略 歴

1929年 11月17日 大阪府にて出生
1952年 3月 立命館大学文学部地理学科卒業
1952年 4月～1953年 5月 京都市立伏見高等学校講師・教諭
1955年 3月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了
1958年 3月 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
1959年 4月 京都大学助手(教養部)
1962年 4月 立命館大学講師(文学部)
1965年 4月 立命館大学助教授(文学部)
1970年 7月 文学博士(京都大学)
1971年 4月 奈良女子大学助教授(文学部)
1972年 5月 奈良女子大学教授(文学部)
1974年 6月 国立民族学博物館教授
1993年 4月～1997年 3月 国立民族学博物館長
1997年 7月～2003年 3月 (財)アイヌ文化振興・研究推進機構理事長
1998年 4月～2006年 3月 ガレリアかめおか(生涯学習施設)館長(非常勤)
2013年 4月4日 逝去(享年83才)

■ 主な受賞・受章

1988年 8月 大同生命地域研究奨励賞
1995年 5月 1994年度今和次郎賞
1996年 5月 中国雲南省社会科学院荣誉院士
1997年 10月 第13回NIRA 政策研究東畑記念賞
1998年 4月 紫綬褒章
2003年 4月 勲3等旭日中綬章
2004年 4月 第14回南方熊楠賞(人文の部)

The Origins of Japanese Ethnic Culture

にほんぶんかのげんりゅうをさぐる

日本文化の源流を探る

発行日——— 2013年11月1日 初版第1刷

定 価——— カバーに表示してあります

著 者——— 佐々木 高明

発 行 者——— 宮 内 久



海青社
Kaiseisha Press

〒520-0112 大津市日吉台2丁目16-4
Tel. (077) 577-2677 Fax (077) 577-2688
<http://www.kaiseisha-press.ne.jp>
郵便振替 01090-1-17991

● Copyright © 2013 ● ISBN978-4-86099-282-8 C1039 ● Printed in JAPAN
● 乱丁落丁はお取り替えいたします

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-86099-959-9 (PDF)